

特別論考

ロシア革命一世紀を生きぬく視角

—『ジョレス&ロイ・メドヴェージェフ選集』日本語版刊行によせて—

佐々木洋

●Zh & Rメドヴェージェフ研究者

序

異論派（反体制派知識人）ジョレス&ロイ・メドヴェージェフが九〇歳を迎えた。

この科学者／歴史家兄弟の『日本語版選集』全三巻四冊の刊行が、現代思潮新社により、実現する運びとなった。

収めるのは、歴史家ロイの『歴史の審判に向けて』に、科学者ジョレスの『ルイセンコの興亡』と『ウラルの核惨事』の三書。どれも著名な邦訳書があるが、『歴史の審判に向けて』の底本は「初版」と第二版をかなり改定した一九八九年ロシア語版である。「初版」はタイプ稿で、ジョレスがそれをマイクロフィルムとし、アメリカの出版社に送った。

『ルイセンコの興亡』と『ウラルの核惨事』は共に露文原著を底本とする。その点、英語版の重訳である既存の邦訳書とことなる。前者はもとに、旧訳の底本が露文テキストを三割も省いていたため、「省略」がないことを、ひとつの特色とする。

現代史を揺るがした旧ソ連体制の、外からは容易に窺えなかった政治と社会の、そして最高権力者の政治的な都合に翻弄された科学界の病

理とあつれきを、まさに身を挺して、その歴史と構造にそくして深部から解き明かし、世界に発信してきたジョレス&ロイの双子兄弟の代表作といつてよい。

『ウラルの核惨事』は、ソ連国籍を奪われたジョレスが英国で書いたものだが、『ルイセンコの興亡』とロイ著『歴史の審判に向けて』のほうは、元来、サミズダートⅡ地下出版（自家出版）として異論派の周辺で回覧されたタイプ稿である。ジョレス稿は、読者が自らタイプで複製し、意見をくわえ、知人に回覧するかたちで、数千人にひろまった。

スターリン暗黒時代の真相にせまる回覧本の存在をつたえ聞いた、刑務所や強制収容所からの生還者と犠牲者の遺族たちが、はるばる著者をさがし、会いにきた。後者には、本人と肉親、親友が秘めていた犠牲者のつらい体験を、ロイの筆を通して語りきかせる面がある。

一九六四年のフルシチョフ失脚後、ブレジネフとイデオロギー担当スースロフが率いる政権は、地下出版の『ルイセンコの興亡』の海外出版（六九年）に激怒、七〇年五月ジョレスを、職場Ⅱオブニンスク放射線医学研究所があるカルーガの精神病院に監禁した。

ソ連・ワルシャワ条約軍が「六八年プラハの春」を圧殺すると、ロイもジョレスと『歴史の審判に向けて』の海外出版を決断。KGBは七一年九月にロイ逮捕を決定、翌月、家宅捜査と資料没収を断行。ロイは二か月間、ソ連各地を逃避行した。年末に『Let History Judge』が米国で刊行されると、世界の著名人となったロイに、当局も手荒なまねができなくなった。

『ウラルの核惨事』には英原子力委員長ジョン・ヒル卿が出版差止を抗告した。危ぶまれた本書を助けたのが皮肉にも、七九年の米スリーマイル島原発のメルトダウン事故だった。

一 メドヴェージェフ兄弟選集全四巻と

『日本語版選集』全三巻四冊の刊行計画

原著全四巻を全三巻四冊に モスクワの人権出版社が二〇〇二〜〇四年にロシア語版ジョレス&ロイ・メドヴェージェフ選集全四巻を刊行した。うち第一巻と第二巻の二巻を、『日本語版選集』全二巻四冊とする刊行計画を、現代思潮新社が進めている。

第一巻 『日本語版選集』の第一巻は、ロイ・メドヴェージェフの大著『歴史の審判に向けて』を二分冊として刊行する。同書には先行する訳書として一九七三〜七四年に石堂清倫訳『共産主義とは何か(上・下)』三二書房刊、がある。

第一巻の第一冊と第二冊も区分も、石堂訳の上巻と下巻の章別区分と同じとなる。

石堂訳は底本としてロシア語版と米ノッブ社から出た英語版(一九七一年)を使用した。石堂訳の露文テキストは、サミズダートⅡ

地下出版(自家出版)のタイプ稿コピーである。このタイプ稿をもとに、やはり米ノッブ社が一九七一年にロシア語版を刊行した。ロイは七四年にこのロシア語版を増補改訂している。

これに対して、現代思潮新社版の『歴史の審判に向けて』の底本は、右の七四年ロシア語版にかなり手が加えられた八九年改訂版である。このロシア語改訂版が出た同じ一九八九年には、コロンビア大学出版局から、英語版改訂版も出ている。八九年刊のロシア語原著と英語版とは、基本的に内容は変わらないが、章と節によつて、やや異なる場合がある。この差異が生じた理由については、ちかく原著者にたしかめてみたい。

第二巻第一冊 ロシア語版第二巻には『ルイセンコの興亡』と『ウラルの核惨事』以外に、ジョレスの他の作品も含まれる。日本語版はこの有名な二著のみをとりあげ、『ルイセンコの興亡』を第一冊とし、第二冊に『ウラルの核惨事』をあてる。

『ルイセンコの興亡』に先行する邦訳書に金光不二夫訳『ルイセンコ学説の興亡』河出書房新社刊、がある。英訳者のマイケル・ラーナー教授がジョレスの懇請にもかかわらず、金光に露文テキストを見せなかつたため、金光は、底本に英語版しか使用できなかった。ラーナー教授は、原著テキストを、科学的には常識であり、あるいは英語圏読者には関心が無いという判断から、三割がた省略してしまったため、英語版にも日本語にも、原著者の含意とメッセージが十分伝わらない箇所が少なくない。金光は原著を求める最後の手段に文通を試み、ジョレスから一〇通もの返信がきた。金光訳の巻末に、金光―ジョレス往復書簡が添えられている。それでも、英訳書の重訳と、かなりの省略がもつ限界を危惧した金光は、将来、原著テキストを入手し、改訂版をだしたいと、あとがきで述べていた。

第二冊 第三巻は『ウラルの核惨事』にあてる。本書のロシア語テキストは、二〇〇四年刊行の露文著作集第二巻に初めて取められたものである。ジョレスは一九七三年に英国への研究出張中にソ連国籍をはく奪され、以後ロンドンを拠点に旺盛な活動を続けてきたが、講演も会見も、著書も論文も、ほとんど英語・英文でおこなった。ソ連当局は国内でジョレスに母国語の出版を容認しなかった。このため、ジョレスが一九九〇年にソ連国籍を回復するまで、彼の公刊物はすべて外国で、外国語で出版された。『ウラルの核惨事』もそうで、露文の公刊物はない。もちろん、ジョレスには、自身の露文テキストはあった。『ウラルの核惨事』は七九年に米ノートン社から英語版が刊行され、同書を底本に八二年に梅林宏道訳が「技術と人間」社から出版された。これに対して、今回、『日本語版選集』第三巻が底本とするのは、英語版のものになった露文テキストそのものである。

露文選集第三巻・第四巻が収める主要作品 今回、『日本語版選集』の対象にならなかった、ロシア語版選集の第三巻および第四巻にも、わが国の読者にお馴染みのものが多い。第三巻は、一九七一年に英マクミラン社が英語版を刊行した著名な『メドヴェージェフ文書 (Medvedev Papers)』の一部をなす長文の論稿「通信の秘密は法により保証されて



ささき・よう一 一九六九年、北海道大学大学院農学研究所修士課程修了。研究業績は『札幌学院大学経済論集』四号（筆者退職記念号）、二〇一二年、所収の業績一覧を参照。定年退職後は、①ジョレス&ロイ・メドヴェージェフ兄弟の研究、②原子力安全神話の謎の歴史の研究、③世界最大企業ウォルマートを前衛とする「小売革命」の研究、に従事。①の最近の仕事は本拙稿付表を参照。②は詳細な年表付の拙稿「日本人はなぜ、地震常習列島の海浜に『原発銀座』を設営したか？—日本一—原発震災に至る原子力開発の内外略史試作年表」前掲、札幌学院大学経済論集「四号」、広島、長崎、ウラル、チェルノブイリ、福島—歴史に刻まれた国際原子力村の相互支援」中部大学、アリナ、ネルソン、リンクステンアイン著『The Retain Revolution』二〇〇九年の拙訳書『ウォルマートはなぜ、世界最強企業になったのか』を金曜日报社から出版した。

いる」と、ジョレスの精神病院監禁を描いた兄弟共著『狂人は誰か』、そしてロイ稿「知られざるアンドロポフ——ユーリー・アンドロポフの政治的伝記」の三作品が中心である。

うち Medvedev Papers は、七二年に金光不二夫訳『ソビエト科学と自由』タイム・ライフ・インターナショナル社刊として出版された。『狂人は誰か』は七七年に、石堂清倫訳『告発する！ 狂人は誰か？』三二書房刊がでている。「アンドロポフの政治的伝記」は九章からなる大部の作品である。選集収録以前に単行本として刊行されたことはない。ジョレスの作品に八三年刊行の毎日新聞社外信部訳『アンドロポフ クレムリン権力への道』毎日新聞社刊がある。ジョレスは、ロイとの秘密の文通回路（後述）で入手したモスクワからのアンドロポフ関連情報に多くを依拠していた。

共著『知られざるスターリン』 露文著作集第四巻は、兄弟が二〇〇一〜二〇〇二年に共著で上梓した『知られざるスターリン』と、一九八三年刊の英訳書 All Stalin's Men で知られるロイ著『スターリンの側近たち』を収める。前者は二〇〇三年に二段組の五〇〇頁をこえる浩瀚な書として久保英雄訳が現代思潮新社から刊行されている。

第三巻までは旧ソ連時代に書いたものだが、第四巻、とくに『知られざるスターリン』は、兄弟が、党解体・体制崩壊後に機密解除になった史料にもとづき、スターリンとスターリン主義をめぐる新たな見かたを呈示するものになっている。当然その作業は、『歴史の審判に向けて』の今日的な検証をふくむものとなる。本書序文は、「スターリン時代と世界史における彼の役割にたいする本当に深い理解はまだ始まったばかり」であり、ソ連崩壊によってこそ、「レーニンとスターリンの歴史的役割をも客観的に評価できるようになった」と述べる。

こうして兄弟は、「残忍な専制君主の個人崇拜のヴェールの向こうには、考えたり、思い直したり、途方もない意志の力を持ち、仕事好きななかなかの知恵者がいた」、としてあらたな「スターリン像」の形象を試みた。

『知られざるスターリン』は「スターリンと核兵器」、「スターリンと科学」も論ずる。そして、ソルジェニーツィンのいう「収容所群島」とは、実は、原水爆の開発を猛進する「原子力収容所群島」のことであり、「機動性に富み、本質的には奴隷労働であるが、熟練労働の、ユニークな供給源であった」スターリンの原子力収容所こそが、世界史が「核の時代」に踏み出していくうえで、ひとつの規定的な役割を果たしたという歴史的理解を提示する。

もう一点、本書は「スターリンが中東に打ち込んだイスラエル問題の楔」に留意を求める。これは、衆知のハンチントン『文明の衝突』以上にスリリングな指摘というほかない。

『スターリンの側近たち』 ロイ著『スターリンの側近たち』に邦訳書はない。同書は、モロトフ、カガノヴィッチ、ミコヤン、ヴォロシロフ、マレンコフ、そして、スースロフをとりあげた。英訳書はあるが、本国でロシア語版が出たのはグラスノチのすすんだ一九八九年である。興味ぶかいことに、ロイによるこの「側近たち」の研究の蓄積が、世紀末から今世紀にかけてのふたりの『知られざるスターリン』研究に生かされていく。兄弟が、露文選集第四巻に『知られざるスターリン』とともに『スターリンの側近たち』を収めた理由を、筆者はそう推測する。八九年版『側近たち』で最終章に登場するイデオロギー担当の第一枢機卿スースロフ（自分の死後も命をまもる「後継者」としてスターリン自らが死の半年前、五二年一〇月末の第一九回党大会で中央委員会幹部会

員に抜擢していた）が、『知られざるスターリン』像を形象する謎解きで、極めて重要な配役を演ずるからである。

メドヴェージェフ兄弟の著作史年表 『日本語版選集』が収める作品が、ジョレスとロイのそれぞれの生涯のどの時点における所産かがわかるように、ふたりの創作活動の歩みを一覧表にしてみた（別表）。

人権出版社によるロシア語版選集は、『ウラルの核惨事』のほかは、露文テキストのあるものをおもな対象としていたため、著名なものでも、ジョレスの『ソヴィエト農業』や『チェルノブイリの遺産』のような、はじめから外国語で出版された作品は含まれていない。

二 『ウラルの核惨事』 核燃サイクル基地Ⅱマヤーク（灯台）の核廃棄物爆発事故

英科学誌に寄稿 一九七三年にソ連市民権をはく奪されたジョレスを、留学先であった英国医学研究所が研究所員として迎え入れた。

七六年にジョレスは、英科学誌 *New Scientist* 創刊二〇周年特集号に寄稿した論文「異論派の二〇年」²⁾で、「指導的原子物理学者と迫害された遺伝学者をつなぐ重要な出来事こそ、一九五七年か五八年に起こったウラルの核惨事であり」、事故は「原子炉が放出された放射性廃棄物」によるものだと言った。

この寄稿を欧米主要紙がとりあげ、各国の核専門家の多くが否定的なコメントを寄せるなかで、とくに、英原子力委員会議長ジョン・ヒル卿が、ジョレス説を「たわふ(rubbish)」あるいは、「空想科学 science-fiction」と一蹴した。米紙も、二〇年前に起きた暴走した原子炉による事故であるという情報筋の説を報じた。ところが、ソ連からイスラエル

●特別論考：ロシア革命1世紀を生きぬく視角—『ジョレス&ロイ・メドヴェージェフ選集』日本語版刊行によせて—

(別表) ジョレス&ロイ・メドヴェージェフ/Zhores & Roy Medvedev兄弟の主要科学論争・歴史・政治史・核問題関係の著作活動年表

年	著者	初版等	著者	邦訳版等
1925		グルジアのチプリス (現トビリシ) で双子兄弟が誕生		
1938		スターリン大粛清の頂点。父 (赤軍軍政大学の哲学講師。レニングラード大学の哲学講師も兼務) アレクサンドルが逮捕される		
1941		父アレクサンドル・メドヴェージェフ、極東マガダン地方コリマの銅鉱山ラゲリで強制労働のため負傷、死亡		
1943		兄弟、17歳で「大祖国戦争」に従軍。ジョレスはクリミア半島に近い、独ノ戦線戦地タマン戦線に負傷。傷重軍人として退役		
1950		ジョレス、ディミトリーゼフ (モスクワ) 農科大学農芸化学・土壌学部卒業。同年、学位 (博士候補) を取得		
1951		ロイ、レニングラード大学哲学・歴史学部卒業。のちに、働きながら通信教育制のソ連教育学大学で研究し、学位 (博士候補) を取得		
1953		スターリン死		
1956		フルシチョフが第20回党大会でスターリン批判。ロイがソ連共産党に入党 (ジョレスは、百害あって一利なしと、一度も入党せず)		
1957		分子生物学専攻のジョレスが、アイソトープ (放射性同位元素) 研究の第1回ユネスコ・パリ会議に出席。海外研究者との知己が広がる		
61-66	Zh	62年に初版『生物学と個人崇拜 農業生物学論争史(ルイセンコ学説の興亡)』の出版。使用済み核燃料タンクが爆発 = 「ウラルの核惨事」		
62-68	R	62年末から『歴史の審判に向けて』の執筆開始。半年毎に改訂。サミズダートとして回覧され、異論派作家やサハロフらも注目		
64-70	R	『政治日誌』という名の文書を毎月5部刊行。定期読者は約40名		
1968	R	サハロフの海外ベストセラー『進歩、平和共存と知的自由』が、『幻の大著 (歴史の審判にむけて Let History Judge)』の存在を公表		
	R	Let History Judge: the Origins and Consequences of Stalinism (original text in Russian)		
1969	R	『歴史の審判にむけて』の執筆活動を理由に、ソ連共産党から除名処分を受ける		
	Zh	The Rise and Fall of T.D. Lysenko		
		ジョレス、『ルイセンコの興亡』の海外出版によりオプニンスク放射線医学研究所を解雇される		
1970		ジョレス、精神病院に監禁される。ソ連内外の科学者や作家の抗議で釈放される。『朝日』や『毎日』など、日本でも報道		
	R	Let History Judge: the Origins and Consequences of Stalinism (in English)		
	Zh	The Medvedev papers: fruitful meetings between scientists of the world		
1971	ZhR	A Question of Madness	Zh	金光不二夫訳『ルイセンコ学説の興亡』河出書房新社
		KGBが、ロイ著 Let History Judge の英語版刊行を知り、9月にロイ逮捕を決定、10月にロイ自宅捜査、勅権・原稿を没収し、ロイ召還		
		ロイは、逮捕を避け、10~12月にソ連各地を遊歴し、逃避行。英語版刊行で、世界の有名作家になったロイを、KGBは逮捕できず		
	Zh	金光訳『ソビエト科学と自由』タイム・ライブ社 (Medvedev Papers)		
1972	R	On Socialistic Democracy (in Russian)		
1973		ジョレスが英国への研究出張中にソ連市民権を剥奪される。以後、ロンドンを拠点に執筆継続、米国など各国で講演		
73-74	R	石堂清論訳『共産主義とは何か (上・下)』三一書房 (Let History Judge)		
1974	Zh	Ten Years after Ivan Denisovich	Zh	安井信子訳『ソルジェニーツィンの闘い』新潮社 (Ten Years after...)
	R	家宅捜査受け、異論派資料を没収される	Zh	石堂清論訳『社会主義的民主主義』三一書房
1975	Zh	Secrecy of Correspondence Is Guaranteed by Law		
	Zh	National Frontiers & International Scientific Cooperation		
1976	ZhR	Khrushchev: The Years in Power		
	Zh	英科学誌『New Scientist』にウラル核惨事に関し投稿 "Two Decades of Dissidence"。世界の核開発当局と科学界に波紋		
		(ジョレスの「ウラルの核惨事」公表に、英原子力委員会議長ジョン・ヒル脚が、放射性廃棄物の爆発はありえない、と一蹴)		
76-77		英日曜誌『Observer』副編集長が、ジョレスに助言: 「情報公開法に則して米国CIAにウラル核惨事故の情報開示を請求されたし」		
	R	ロイ編集/石堂清論訳『ソヴェト反体制』第1・第2巻、三一書房		
1977	Zh	英誌『New Scientist』に新稿 "Facts behind the Soviet Nuclear Disaster"。オークリッジやロスアラモスの核開発当事者が注目		
	R	Problems into the Literary Biography of Mikhail Sholokhov		
	Zh	Hazards of Nuclear Power (with A. Roberts)	ZhR	石堂清論訳『告発する! 狂人は誰か』三一書房
		ラルフ・ネーターと米紙『ワシントンポスト』が、ジョレスの指摘 (使用済み核燃料の爆発情報) を要約して公開		
1978	Zh	Soviet Science	R	佐藤藤次郎訳『ソ連における少数意見』岩波新書
	R	Philip Mironov and the Russian Civil War (with S. Starikov)		
		ジョレス、米ロスアラモス国立研で水爆の父トドワード・テラーに対峙。テラーが、自説の「ウラル核汚染の水爆実験失敗説」に固執		
1979	Zh	Nuclear Disaster in the Urals		
		(J・ヒル脚の抗議で遅延していた本書刊行を、「スリーマイル島原発メルトダウン」事故の発生で、出版社が決断、市販開始)		
	R	On Soviet Dissent (in Italian)		
	R	Nikolai Bukharin: The Last Years (in Italy)	R	石堂清論訳『失脚から銃殺まで—バーリン—』三一書房
	R	On Stalin and Stalinism	ZhR	下斗米伸夫訳『フルシチョフ権力の時代』御茶の水書房 (1980年刊)
		ロイが、モスクワのソヴェトドフロフ選挙区で「1979年選挙」集団を代表しソ連最高会議代議員候補選挙に立候補。80年、81年に立候補		
1980	R	The October Revolution (published in 1979)	R	石堂清論訳『スターリンとスターリン主義』三一書房
1981	R	Leninism & Western Socialism	Zh	熊井謙治訳『ソ連における科学と政治』みすず書房 (1981年刊)
1982	R	Khrushchev	Zh	梅林宏道訳『ウラルの核惨事』技術と人間
	Zh	Andropov		
1983	R	All Stalin's Men	Zh	毎日新聞外信部訳『アンドロポフ クレムリン権力への道』毎日新聞社
	R	Nikolai Bukharin: The Last Years (in English)		
1984		ロイ、モスクワのアパートで自宅軟禁。アパートに検問所ができる		
1986		ソ連ウクライナ共和国チェルノブイリ原子力発電所で事故		
	Zh	Gorbachev		
	R	China and the Superpower		
1987	Zh	Soviet Agriculture (佐々木洋が1995年に邦訳)	Zh	毎日新聞外信部訳『ゴルバチョフ』毎日新聞社
		ジョレスが、日本外務省の招へいにより、初の来日。意味あるゴルバチョフ情報がない外務省当局者に東京でレクチャー		
1989		ロイが、初代ソ連最高会議人民代議員のひとりに当選。サハロフ、シチェルバク、アラ・ヤロシンスカヤらも落選当選		
		ソ連最高会議が、ロンドンからジョレス・メドヴェージェフを招へい、「ウラル核惨事」問題を審議。ソ連政府が「1957年惨事」の事実を認証		
		ロイが、ソ連共産党に復讐。ベルリンの壁崩壊		
1990		ゴルバチョフ政府がジョレスのソ連市民権を回復	R	ロイ/キエフ共著『証言 内側から見たペレストロイカ』毎日新聞社
1991		ソ連邦崩壊。ソ連共産党解体		
1992	Zh	Legacy of Chernobyl	Zh	吉本晋一郎訳『チェルノブイリの遺産』みすず書房
1995			Zh	佐々木洋訳『ソヴェト農業: 1917-1991』北海道大学図書刊行会
1997	R	Russian Revolution in 1917 (in Russian in 1998)	R	石井規樹訳『10月革命』未來社 (1998年刊)
		ジョレス二度目の来日。札幌学院大学50周年国際シンポジウムで基調講演。北大スラブ研究センターおよび札幌大学でも講演		
1998	R	Capitalism in Russia? (in Russian)	R	石井規樹・沼野充義監修『1917年のロシア革命』現代思潮新社
	Zh	『市場社会の警告—シンポジウム 市場社会と共生の原理』現代思潮社		
1999	R	New Crisis of Russia (In Russian)	R	海野幸男・渡辺寛美訳『1998年危機—1998年夏』現代思潮社
	R	ロシアは資本主義になれるか? (加藤藤津子・蓮見雄訳、現代思潮社)	R	ロシアは資本主義になれるか? (加藤藤津子・蓮見雄訳、現代思潮社)
		ロイが、『ロシアは資本主義になれるか?』の出版を機に、東京大学、北海道大学、札幌学院大学など、日本各地の大学で講演		
2000	R	Putin's Enigma (in Russian)	R	海野幸男訳『プーチンの謎』現代思潮新社
2002	ZhR	Unknown Stalin (in Russian)		
	Zh	Stalin and the Jewish Question		
02-04	ZhR	選集全4巻 Selected Works, I-IV (in Russian)		
2003			ZhR	久保英雄訳『知られざるスターリン』現代思潮新社
2004	ZhR	Solzhenitsyn and Sakharov: Two Prophets (in Russian)		
2005			ZhR	大月晶子訳/佐々木洋解題、『ソルジェニーツィンとサハロフ』現代思潮新社
2007	Zh	Nutrition and Longevity (in Russian)	R	海野幸雄訳/佐々木洋対談・評註『スターリンと日本』現代思潮新社
2008	Zh	Polonium in London (in Russian)		
2010	ZhR	Memoirs 1925-2010 (in Russian)		
2011		ジョレスが、3・11福島原発震災をうけ、「キシチュム、チェルノブイリ、そしてフクシマ」を『週刊金曜日』847号に寄稿 (拙訳稿)		
	R	And Quiet Flows the Don; Puzzles and Discoveries of the Great Novel (in Russian)		
2012			ZhR	佐々木洋訳/天野尚樹訳『回想 1925-2010』現代思潮新社
2014	Zh	Dangerous Occupation (in Russian)90歳記念エッセー執筆つく		(2015年8月現在までに78編のエッセーが筆に及ぶ)
2015			ZhR	現代思潮新社版の選集全二巻四冊の刊行計画が固まる

注: 1. ZhはZhores著の、Rはロイ著の、ZhRは兄弟共著の略。2. 本リストは、ジョレスの加齢学や分子生物学の専門分野の著作を含まない。

に移住したワイツマン研究所のトゥメルマン教授が、ジョレス説をうらづけるような、南ウラルの核事故現場の近くを通過した一九六〇年当時の見聞を、新聞に投稿し、ここに、「ウラルの核惨事」(ソ連は一九八九年まで沈黙)が、科学界のひとつの関心の的になっていく。

二度目の投稿と全米各大学・研究所からのジョレス招聘　そこでジョレスは、まず米国の雑誌記事索引にあたり、次に、大英図書館その他、英国で閲覧できるソ連文献を渉猟、必要なコピーも入手して、ウラルの大惨事の性質と規模、放射能汚染地域の現状を客観的な分析にあたった。ジョレスは、前掲誌に再び投稿した論文「ソ連核惨事の背後にある事実」³で、この分析の概略とともに、一九五八年に、ジョレスの当時の上司であるティミリヤゼフ農科大学クレチコフスキー教授(ウラル惨事の核汚染調査チーム責任者)から聞いていたウラル核惨事の特徴を提示した。

ジョレスの七七年の英誌再投稿には、米国の核開発に深くかかわるオークリッジやアルゴンヌ、ロスアラモスなどの国立研究所が注目した。もともと生体の分化と老化(加齢)のメカニズムと、その過程で放射線に起因して現れる体細胞の突然変異の研究者として、全米各地の大学や加齢学の国際学会などから講演依頼があつたジョレスに、ウラル核惨事をめぐる講演と研究会への招へいが加わり、かつてマンハッタン計画をささえ、現在も米国の核開発の諸研究にかかわる国立研究機関の専門家と議論する機会が訪れたのである。

ソ連核燃料サイクルの要 \equiv マヤーク(灯台)　チェルノブイリ事故以前の最大の核事故である一九五七年秋のウラル核惨事は、放射性廃棄物の爆発事故だった。この廃棄物はマヤークのプルトニウム生産炉が放出したものである。二〇一五年の今でもマヤークには原発と原潜で使用

済みの核燃料が再処理のために搬入されてくる。旧ソ連の軍事関係施設を偵察衛星で監視する以前、米軍はU・2高高度偵察機を飛ばしていたが、一九六〇年にU・2機撃墜事故が起きたのも、南ウラルのこの秘密の核開発拠点地域である。

オークリッジとロスアラモスの対照的反応　『ウラルの核惨事』は、英科学誌の二論文と、米国での一連の講演準備を再構成したものといえる。ジョレスは放射能によるDNAの損傷と修復可能性の論争点には通じているが、放射性廃棄物(核のゴミ)や放射線生態学の専門家ではない。だがジョレスは米国の核開発センターの専門家を前にまったく動じなかつた。ジョレスはいう。「自分の利点は一つしかない。しかしわたしは、西側科学者が完璧に無視し続けてきた露文雑誌掲載のソ連の放射線生態学研究を自由に読むことができることで、米国人研究者のそれよりも有利である。ウラルの悲劇的な核事故のあと、ソ連では公開・非公開の核災害分野の環境研究が数多く立ち上げられていたのである」⁴と。ソ連の学術雑誌に載つたウラル核惨事研究は、検閲のため、場所、時間、強度、などを特定していない。

だが、戦前日本の「ふせ字」が識者には無用であつたように、検閲が厳格な文献でも関連論文をクロスして読めば、事情に精通する関係者には容易に謎解きができる。

長年、旧ソ連とロシアの放射線防護の責任者をつとめ、いわばロシア「原子力村」の歴史の裏表に通じたレオニード・イリイン元ソ連医科学アカデミー副総裁が、右のような旧ソ連の国家機密の謎解きをした。「非のうちどころのない事例として、著名な異論派(反体制派知識人)であるジョレス・メドヴェージェフが実行した、湖や河川の放射線生態学に関するソ連学術文献にたいする見事な分析がある」⁵と述べていたほ

どである。

ジョレスは、本書第四章から一章まで、南ウラルで大きな核汚染事故が複数回おき、被災地域が広範に及ぶことを水草、魚類、哺乳類、渡り鳥、土中生物、森林などの被ばく状況と生態変化に即して、ロシア語雑誌に掲載された文献に依拠して整理・解説していく。

講演が終わると、オークリッジの講演会場を埋めた六、七百人から期せずしてスタンディグオーバーションが起きた。オークリッジ研究所ではCIAが蒐集したウラル核惨事関連情報を調査研究するプロジェクトが活動していた。本書にも紹介されている諜報情報を知りつつ、CIAの分析力を圧倒するジョレス講演にうたれるところがあったのである。

実は米国も、核の生産拠点ハンフォードの原子炉から放出された放射性廃棄物の処理をめぐって、あやうくウラル惨事型の危機を免れた経験がある。それゆえ、核開発の当事者も、ジョレスの所説に対応がことなる。ハンガリー系移民のエドワード・テラーには、スターリン体制への恨みがある。米国の核開発の旗印が、「反ファシズム」から「反スターリン（反ソ）」に移行したのではないか。それ促したのがスターリン体制そのものでないか。

ただし、それは『知られざるスターリン』第二部の「原子力収容所」の論点である。

J・ヒル卿の抵抗とT.M.チャイナシンドローム 英誌二論文と米国講演を通じて、『ウラルの核惨事』の契約も執筆も印刷もすすんだ。ご覧のように第一章には、ヒル卿が、ジョレス説を「たわごと」、「空想科学」と評したと印刷されている。英国には存命する人物を誹謗中傷する本を刊行すると出版社が告訴される法律がある。米国では著者が裁判にかけられる。「たわごと」も「空想科学」も、報道の言葉であって、ジョ

レスの創作ではない。

一九七九年三月、米国スリーマイル島原発でメルトダウン事件が起きた。折からハイウッド制作の「チャイナシンドローム」が封切されていた。このハリウッド映画を、単なる「たわごと」とか「空想」と片づけられない核の時代の現実が、出版社の背中を押した。

米国への講演旅行が「ソヴィト科学史」研究を誘う ソ連国籍をなく奪われ、留学先のロンドンの英国医学研究所に迎えられたジョレスに、米国および大陸ヨーロッパ諸国から講演依頼があいついだ。『ルイセンコの興亡』の著者であり、「ウラルの核惨事」で知られるジョレスに、プリンストン大学のR・タッカー教授らは、核開発で米国を猛追し、スプートニクを飛ばした、ソ連の科学の歴史について講演するよう要請した。ジョレスは、スターリン体制下の巨大科学推進体制の歴史研究に踏み込んでいく。ひとつのテーマが、「シヤラーシカ」囚人科学者の獄内「研究施設」の果たした役割の研究である。航空機設計者ツポレフや、スプートニクを飛ばしたロケットの開発者コロリョフは囚人科学者であった。オプニンスク放射性医学研究所のジョレスの上司ティモフェフ、レソフスキーも元囚人科学者だった。講演の成果が『ソ連における科学と政治』にまとめられていく。

ウラル核惨事がエリート科学者と若手異論派をむすぶ 一九五六年のフルシチョフ秘密報告でソ連でも、スターリン粛清の内情を知った若い政治的異論派が登場したが、彼らはソ連軍のハンガリー介入直後に一斉逮捕された。スターリン粛清の犠牲者数百万人の名誉回復が進行中であつたため、そして西側の眼がスエズ動乱に向けられる中で、ソ連の若い数百人の逮捕は注目を浴びなかつた。科学界のエリートを含む、フルシチョフに異議を唱える知識人グループと、若手研究者や学生のグ

ループにも、今なお接点が乏しかった。

だが、ジョレスら若手民主派科学者と真面目なエリート科学者を隔てた垣根が一九六二〜六四年頃には失われ、双方の協力関係が生じた。垣根を取り払ったのが、「ウラルの核惨事」だった。核物理学者たちが、放射線生物学と遺伝学の問題に極端に神経質に振舞うようになり、政府もついに放射線生物学、放射線医学、医学の分野で古典的遺伝学を合法化する措置をとらざるをえなくなった。予知できたはずのものを、その可能性を信じなかったことで起きたこの核惨事が、核物理学者の状況を変えた。彼らは、放射能の真の危険性、核爆発の真の影響を十分に認識したのである。⁽⁶⁾

『ソ連における科学と政治』 ジョレスは言う。「多くの国家勲章や政治面での評価、称号、賞、学位、そして重要な地位までがすべてその威信を侵食され、下落した。……科学界のピラミッド型重層構造の崩壊は、若い政治的に活発なグループとエリート層のより正直な代表との密接な接触をいつそう簡単にした」。五七〜五八年頃、想像すらできなかった事態が六二〜六四年におこり始めた。「両世代の協力や友好が可能になっただけでなく、年上の、特権に恵まれた世代が、若い同僚たちの政治的異議申し立てを直接に支持した。彼らはサミズダート（地下出版）網を組織するための資金援助を行ない、サミズダートの著作を守り、再生産するための設備を提供し、問題に巻き込まれた人々を強力に励まし、擁護した」。ジョレスやロイのサミズダートが受けいれられたひとつの背景である。⁽⁷⁾

三 『歴史の審判に向けて』（旧邦訳名『共産主義とは何か』）を書かせたのはだれか？

旧ソ連・ロシアの現代史を、スターリンおよびスターリン主義の歴史とのかかわりなしに論ずる歴史家はいない。ロイの『歴史の審判に向けて』—スターリンに主義の起源と帰結—は、スターリンとスターリン主義の研究史における記念碑的な労作といつてよい。

そこでロイ著『歴史の審判に向けて』が陽の目をみるまでのおもな経緯をみておこう。

アンドロポフもロイ著の初版を読んでいた。ロイが『歴史の審判』に向けて、スターリン主義の起源と帰結』を書きはじめたのは一九六二年。第二〇回と第二二回の党大会後には、これはまったく合法的なテーマであり、新聞雑誌にも收容所体験などの様々な記事をみかけた。スターリンの犠牲になった囚人、非業の死を遂げた党と国家と軍の旧指導部の名誉回復が続いていた。『ノーヴィ・ミール（新世界）』のソルジェニーツイン著『イワン・デニソヴィッチの一日』の掲載は、この種の作品や回想の出現を刺激するものであったが、スターリン主義が台頭し支配的現象になった歴史全体の系統的な研究は現われなかった。

ソ連の内外で一部の歴史家とそのスターリン問題をとりあげていたが、ロイは当時、公式の職業的な歴史家でないため、党のアルヒーフ（歴史文書庫）を閲覧できる立場になかった。一九五一年にレニングラート大学（現サンクトペテルブルグ大学）哲学歴史学部を卒業したロイは、歴史教師としてウラル地方に赴任後、ヴィボルグ（レニングラード地方）近くの中等学校に異動になった。校長に任命されたロイは、働きながら研究する通信教育の教育大学大学院に所属し、学位取得後、モスクワの

教科書を編集・出版する出版社の編集長代理になった。すなわち、この職責をこなしながら「歴史の審判」を書いていたのだ。

一九六四年末には草稿がかなり分厚くなつた。この執筆に何も非合法めいたものはなく、ロイの黨員仲間（ロイは一九五六年、第二〇回大会後に入党。ジョレスは「百害あつて一利なし」と入党せず）である、大学時代からの友人には、レニングラードやモスクワその他の党組織の要職についていたものもいた。ジョレスによれば、ロイの最初の草稿の読者には、当時のソ連共産党中央委員会書記のイリイチェフとアンドロポフも含まれていたという。

誰がロイに書かせたのか？　ロイが依拠した情報源は、新聞の公表記事であり、それまですでに数百人が残していた未公開の回想記であり、ボロクタ、ノリリスク、ウラル、コルイマ、カラガンダなどの収容所を生きのびた元囚人の思い出であつた。ロイは、ジョレスとの共著『回想 一九二五〜二〇一〇』でこう述べている⁽⁸⁾。

これらの人びとは、わたしに対し何か喜んで物語を聞かせる用意があり、少なくとも、自分の意見を吐露してくれる人々だつた。わたしの名前が、往年の「コルイマ人」の間に知れわたるようになる。矯正労働収容所や拷問の刑務所の体験者の多くが、奴隷状態の辛い体験を語り聞かせるために、そして彼らが、収容所のほかの犠牲者から打ち明けられたことすべてを伝え聞かせるために、彼ら自身でわたしを見つけて出そうとしていた。

『歴史の審判に向けて』は、右のような人びとがロイの筆にたくした歴史書である。

大物作家たちの膨大なコレクション　公認歴史家でないロイは、党

の文書庫は閲覧できなかったが、シーモノフ、エレンブルク、トリーフオノフらがそれぞれ所蔵する膨大な史料を閲覧できた。かれら大作家は、惜しげもなく、自分の莫大なコレクションをロイの利用に供した。たえず更新されつつある『歴史の審判に向けて』のロイの所見は、作家にとつても貴重な情報だつた。ロイの閲覧について興味ある出来事があつた。

トリーフオノフの父は、ロシア南部のポリシエヴィキ機関の創設者のひとりであり、一九〇五年と一七年の革命の参加者であり、赤軍創設者のひとりでもあつたが、メドヴェージェフ兄弟の父と同様、スターリンの粛清により非業の死を遂げた。通常、こうした場合、個人所有の文書は内務人民委員部の機関に押収されるが、トリーフオノフ家もつ、全露中央執行委員会コサック部の、秘匿され封印された文書群は、そつくり見逃され数十年も眠つていた。内戦時代のドン地方のコサックと騎兵隊の運命に惹きつけられていたトリーフオノフが、ロイに、労働赤軍の「赤い」もしくは「真紅の」のドン地方コサックの指導者になつた、民主主義派の将校フィリップ・ミローノフをモデルに歴史小説を書くこととしていた元第二騎兵軍政治委員セルゲイ・スタリコフの共同執筆者になつてほしいと懇請した。ふたりがまる一年かけて上梓したのが『フィリップ・ミローノフの生と死』であり、その英語版『フィリップ・ミローノフとロシア内戦』も刊行された⁽⁹⁾。

元囚人のティモフェエフ・レソフスキーとヤクボーヴィツチの収容所体験　ソルジェニーツイン文学が『収容所群島』で描いたスターリンのソ連を、歴史学の立場から描いた作品がロイの『歴史の審判に向けて』である。ソルジェニーツイン自身、スターリンの収容所から生還した作家であるが、このノーベル賞作家も、多くの収容所体験者の回想

記と証言に基づいて、一連の作品を書きあげた。こうして彼の収容所文学に貴重な素材を提供した多くの元囚人のなかで、やはりジョレスとロイのメドヴェージェフ兄弟の創作活動にも大きく寄与した著名な元囚人が二人いる。元囚人科学者で、一九六〇年代にオブニンスク放射線医学研究所でジョレスの上司となるニコライ・ティモフェエフ・レソフスキーと、ロイの『歴史の審判に向けて』のもっとも重要な証言者のひとりになるミハイル・ヤクボーヴィッチである。だが、元囚人二人に対する接し方は、メドヴェージェフ兄弟と、ソルジェニーツインでは異なっていた。ヤクボーヴィッチの場合をみよう。

ヤクボーヴィッチは一九一八年までメンシエヴィキの主要な活動家で、一九三〇年に逮捕され、五六年までさまざまな刑務所や収容所にいた。彼は一九六六年に、カラガンダからロイのいるモスクワに来て、内務人民委員部の機関がどのように三〇年代の政治裁判劇を組み立てたのかを語った。ヤクボーヴィッチは翌六七年に、ときのソ連検事総長あてに、三六年前の「メンシエヴィキ連邦ビュロー裁判」に関する長文の「上申書」を提出し、同時に、この「上申書」をソルジェニーツインとロイにたくした。ロイは付託にこたえ、『歴史の審判に向けて』第四章「スターリン崇拜のはじまり」で第三項の「一九二八〜三二年の政治裁判劇の偽りの性格」を立証する史料として「上申書」のほぼ全文を再現している。¹⁰⁾

『収容所群島』による歪曲に抗議するヤクボーヴィッチ 『収容所群島』も第一部「牢獄産業」の第一章「法は成熟する」で、「メンシエヴィキ連邦ビュロー裁判」をスターリンが政治裁判劇で上演した出し物のからくりを説明する資料としてヤクボーヴィッチの「上申書」をとりあげた。ところが『ソルジェニーツインの闘い』（邦訳・新潮社）の著書があり、もっ

とも初期からの作家の理解者・協力者のひとりだったジョレスが非常なショックを受けたというように、彼の「上申書」のとりあげ方は、実に荒っぽい歪曲にみちたもので、それは、単なる間違いではなくヤクボーヴィッチ当人を愚弄するものだった。三一書房版『共産主義とは何か』上巻の二〇六〜一四頁と、新潮社版『収容所群島』2の三八五〜九一頁をどうか対照していただきたい。¹¹⁾

一九七五年、ロイがモスクワで編集していた政治論文集『二〇世紀』（露文）を、ジョレスがロンドンで出版しはじめたとき、この論文集の投稿者のひとりだったヤクボーヴィッチが、ロイとジョレスに、「自分の回想録への序文に、ソルジェニーツインの書いた「一件」は完全に歪曲されているという説明を入れて欲しい」と依頼してきた。ジョレスは一九八一年にロンドンとニューヨークで刊行された論文集『二〇世紀』英語版の序文で、ヤクボーヴィッチのメッセージを伝えた。¹²⁾

ロイは『歴史の審判に向けて』の改訂版で、故ヤクボーヴィッチの要請を実現した。改訂版は、彼の「上申書」のほぼ全文を紹介するまえに、以下のように述べる。¹³⁾

禁固二四年の苦難にもめげず、メンシエヴィキ連邦ビュロー裁判の主な被告人のひとりヤクボーヴィッチは生還した。釈放後、カラガンダの障碍者保養施設にいたが、毎年モスクワを訪れていた。かれは何度か著者と話し合い、一九三〇年代初めの政治裁判を組み立てる方法を詳細に語ってくれた。そうした裁判の真相を暴露する決心をしたヤクボーヴィッチは、一九六六〜六七年にソルジェニーツインとも同じく詳細に話し合った……残念なことに、ソルジェニーツインはヤクボーヴィッチの多くの証言を歪めている（以下、作家の

歪曲の例を具体的に示す)……

KGBのロイ逮捕決定と著書窃盗容疑の家宅捜査 一九六八年八月、ソ連・東欧軍が「プラハの春」を圧殺すると、ロイはジョレスと、タイプ稿でほぼ千枚の『歴史の審判に向けて』の運命を心配、外国での出版を決断した。兄弟が米国でもっとも信頼する知人が『ルイセンコ問題』の著者で知られるデヴィッド・ジョラフスキー教授だった。幸いジョレスの夏期休暇が残っており、器具が完備したオブニンスクの自宅の暗室で一日七時間、休暇を延長してマイクロフィルム作成を急いだ。ジョレスには、ソルジェニツィンの依頼で、『煉獄のなかで(原題「地獄の第一圏」)』の海外出版用マイクロフィルムを作成した実績もある。

一方、サハロフが読んだタイプ稿が、ロイの掌握しきれないルートから、兄弟の意図しない外国出版社の手にわたり、「反ソ活動」のかどでロイが拘束される恐れもあった。

やがてKGBは、外国大使館の要員が察知した、英米の著名出版社が「歴史の審判」を七二年一月に刊行するとの出版予告に驚いた。ジョレスによると、近年、機密解除された資料はKGBが七一年九月にロイ逮捕を決定したとある。KGBはロイ逮捕を正当化できる方策を検討、断行した。「図書館の書籍窃盗容疑」のでつち上げによる家宅捜査と逮捕である。

ロイが学位を取得した教育大学の図書館司書がレーニン図書館の貴重書を窃盗したという刑事事件の裁判が予定されていた。一〇月、ロイがこの司書の知人であり、ロイの書齋に盗まれた書籍があるとの「容疑」で家宅捜査を実行、書齋の文献資料を大量に押収した。

ロイの逃避行 ジョレス強制入院以来、兄弟には数か月身を隠す

だけの備えがあった。翌朝、KGB召還の電話をうけたロイは、旅券の提示を要しない航路(河川と湖沼)や鉄道を乗り継ぎ、ソ連各地の知人宅に滞在する逃避行を決行した。KGBもそれを予想、尾行をつづけた。アストラハン(ヴォルガ川のカスピ海河口)でロイを匿ったガザリヤンは一五年の刑期を務めあげた内務人民委員部の元取り調べ官である。被告人を訊問し、拷問する側にいた元取り調べ官は、『歴史の審判に向けて』の極めて重要な証言者のひとりだった。街の劇場で働く元取り調べ官の娘が、ロイがアパート入口の検問を難なくすり抜け、確実に高飛びできる一計を案じた。舞台化粧のプロたちがロイの変装を指導し、見事に変身させた。指導者はモスクワでも知られた演劇功労者だった。翌朝、かつらをかぶり、口ひげと顎ひげをつけたロイが、杖をつき、買い物かごをさげ、身をかがめながらアパートを出たとき、作戦中のソ連車「ボルガ」のKGB職員は気づかなかつた。このあと、ロイは、やはり各地の支持者に助けられながら、カフカースに移り、オデッサに滞在し、黒海クルーズに乗船し、レニングラードやエストニアをまわる。

書籍窃盗の刑事裁判。判決と上告、そして帰宅 ロイは、女性司書の窃盗にかかわる刑事裁判で、刑法第七〇条の「反ソ扇動・宣伝」容疑者とされていた。この裁判を担当したのは女性判事で、KGBが同判事に圧力をかけたことが逆効果となった。女性裁判官が、「実際にロイ・メドヴェージェフを有罪とする実証がない」ことを強調する判決を下したのだ。

検事とKGBは直ちに上告、被告の女性司書に、量刑を軽減するかわりに、ロイの不利になる証言を求めた。窃盗の刑事裁判でロイの逮捕を正当化できる可能性は小さくなった。

それでも、ロイがモスクワの自宅に戻ったのは、米国で米ノップ社

が『歴史の審判に向けて Let History Judge』を晴れて刊行してからである。その頃には、新聞・雑誌に多くの好意的な書評があらわれ、おかげで米英以外の西側諸国にも本書の入荷が進んでいた。この時期に、いまや世界に知られる存在となった著者の逮捕に踏み切ることは、どうみても不適切であるとKGBは考えた。逮捕すればかえって著者と本書を広告・宣伝するだけに終わってしまうからだった。

失業を許さない労働者の国での失職 著名になったロイが帰宅した。だが、彼は自分が失業者になっていることが判明した。以後、一八年間、当初は絵に描いた餅に過ぎなかったグラスノスチ（情報公開）が実質化しはじめる、チェルノブイリ惨事後の旧ソ連各国の民主化運動の高まりのなかで、ロイが、ロシア共和国人民代議員選挙で当選し、ソ連邦最高会議のメンバー（ソ連の国会議員）に選出されるまで、失業を許さない社会主義国の母国で、自分の専門性を活かしよう、いかなる職位につき可能性をも奪われていたのであった。この国ではロイに届く僅かな印税収入は、労働の代価ではなく、不労所得と見なされていた¹⁴。

四 一九八九年改訂版『歴史の審判に向けて』スターリンとスターリン主義の新しい

本書の初版と増補改訂第二版 石堂訳『共産主義とは何か』は、一九六二～六九年初にかかれた『歴史の審判に向けて』スターリン主義の起源と帰結』のタイプ稿とそれにもとづく米ノッップ社刊 Let History Judgeをもとに邦訳された。このあと、ロイは、一九六九年から七三年春までに書きあげた『歴史の審判に向けて』の増補改訂第二版を一九七四年に同じ米ノッップ社から刊行した。これが活版印刷された本書

の最初の露文版である¹⁵。

だが、ロイは七三年以降にも、スターリン主義とその時代にかんする多様な資史料を入手でき、その大部分はこれまで未公表のものだった。さらに七〇年代には外国人研究者のソ連史研究に注目すべき業績があらわれはじめた。しかし、本書の七四年ロシア語版は、すでに分量が千頁に達しており、ロイはこれ以上改訂も増補も加えないと決めた。本書で提起できなかった多くの重要問題の解明につながる、別の新しい著作にとり組み始めたからである。

八九年改訂版の初版との違い それでは、今回の現代思潮新社版『歴史の審判に向けて』の底本である一九八九年改訂版の新しいと特徴はどこにあるのか。

外見的な特徴からいうと、初版が二部編成だったものが三部編成になった。初版の第一部が二分され、八九年改訂版では第一部は最初の四章のみとなった。全一五章のテーマに基本的な違いはないが、各章の節のレベルの構成では、とくに一部（第一～四章）と二部（第五～八章）においてかなり改訂されている。

初版と比べた八九年改訂版の違いには、書き直した部分と、初版になかったものを書き下ろした部分の両面がある。書き下ろし部分が増えれば、当然ながら全体の分量がふえる。おそらく、ロイは、全体のボリュームを増やさず、書き下ろし部分を加えたかと思われる。というのは、書き直しの箇所に、初版の記述を簡略化しようとした形跡がかなり見うけられるからだ。三一書房版の上・下巻のイメージでは下巻の分量の方が多し。一方、八九年改訂版は分量的に上下巻で大きな違いがないものと思われる。ということは、書き下ろしとなった部分が上巻の方に多いという結果になる。すなわち、石堂訳で本書を読まれた方は、現代思

潮新社版が、かなりの改訂を加えられたという印象をもつであろう。

ロイの、スターリンとスターリン主義理解の深化 プラハの春圧殺の一九六八年当時と、その二〇年後の一九八〇年代末までに、ロイのスターリンとスターリン主義を考察する世界観と歴史観が深化していったと思われる。ロイは一九七八年に書き、八〇年と八二年に手を入れた論稿「わたしはこの国の誰の代弁者なのか」でこう述べたことがある。

歴史家としての仕事も、歴史の地層を一枚一枚はがすように明らかにしながら、進めていく必要があった。政治家としての仕事も、過去から現在へと徐々に前進しながら、進めていく必要があった……

ソ連の民主化を唱えてはいても、性急な変化を望んだことはない。過去の情性はあまりにも重く、体制は依然としてあまりにも堅固だった……わたしが革命ではなく進化を支持する者だというのはわかりにくいかもしれない。しかし現状ではそう判断するしかないとなしは考える……

こうした理解は、『歴史の審判に向けて』の刊行後、ソ連社会の漸進的な「民主化綱領」を呈示する『社会主義的民主主義』を仕上げ、次いでジョレスと共著で『フルシチョフ権力の時代』を書き、さらには、単著『一〇月革命』にとりくむ過程で、ロイ自身がより鮮明に意識するようになったと思われる。邦訳者の石井規衛のすぐれた解説が述べるように、ロイは『一〇月革命』の考察で「選択肢的方法」にもとづき、ポリシェヴィキの「憲法制定議会への態度」が適切ではなかったこと、そして、「内戦の勃発と本格化の責任の多くは、ポリシェヴィキ政権が自ら

採った「間違った」政策にあると主張して、ロシア革命史をめぐる「目的論的な、あるいは「実現史観」的な解釈」や、「単線的な「建設史観」的解釈」に対する批判を提起した。

漸進的民主化綱領の提起と農業集団化の研究 右の過程で、ジョレスは一九七〇年に『メドヴェージェフ・ペイパー（邦訳名「ソビエト科学と自由」）』として知られる『科学者の国際協力と国境』と『信書の秘密は憲法により保証されている』を上梓し、ソ連国籍を剥奪されて以降は英国で、七六年に『科学の国際協力の人民戦線（邦訳なし）』を、七八年には『ソ連の科学（邦訳名「ソ連における科学と政治」）』を書きあげている（別表）。

そして、ロンドンとモスクワに切り離された兄弟は、秘密の連絡回路をも活用しつつ『フルシチョフ権力の時代』（別表）を共同執筆しながら、旧ソ連のアキレス腱である農業問題、より直裁には、一九三〇年代の強制的集団化の歴史構造の解明に踏み込んでいく。

「歴史の地層を一枚一枚はがすように」解明していった兄弟の到達点のひとつが、モスクワでKGBによる自宅軟禁中のロイから、秘密の回路で資料提供をうけつつ、一九八七年に書きあげた、ジョレス著・拙訳『ソヴィエト農業』である。本書は、ロイ著『一〇月革命』の「選択肢的方法」に依拠し、「偶然、故意、無知のどれが拒絶したのかはともかく、可能であったもうひとつの道筋」、すなわち、可能でありえた選択肢を提示せんとする研究だった。本書に一九八〇年代半ばに兄弟が到達した歴史観が示されている。

そのひとつが、「マルクス主義理論ではプロレタリア革命と称している一九一七年革命は、根本的には農業革命であった。それは、土地問題の解決、土地の再配分のために決起した農民の自然発生的反乱」であり、

「最強政党である社会革命党が……農村共同体こそ将来の社会主義共和国の潜在的にごく自然な単位」と考えたのに対し、「社会民主労働党ポリシャヴィキ派がこの見地に精力的に対決した。ポリシェヴィキのこうした立場が、一九一八〜二一年のレーニンの誤謬と「戦時共産主義」という全く取り返しのつかない政策に帰結した」という認識である。¹⁸⁾もうひとつ、同書第三章「集団化」は結論としてこう述べる。¹⁹⁾

スターリンの集団化にともなう、数百万の富農とその他の農民、また農業専門家に対するテロルの行使と、一九二三〜三三年の悲劇的飢饉とは、政府と大衆の關係に深刻な裂け目を創り出した。党は方向を見失った。一九三二年十二月に党全体の粛清が始まったが、そのときまでには最も有能で穩健な指導者はすべて追放されてしまっていた。この粛清がスターリンの崇拜と、彼の究極の独裁体制の基盤を創り出した。一九三六〜三八年のテロルは、二九〜三三年のテロルとの多くの因縁をもっている。

わが国には『スターリン政治体制の成立』全四部とそれを補完した『上からの革命』という溪内譲の非常に精緻で優れた研究がある。ロイは、一九八九年改訂版『歴史の審判にむけて』に至る過程で、ジョレスとの協同作業をつうじて、スターリンによる『上からの革命』をめぐる溪内と同様の所説に到達しつつあったようにみえる。

兄弟のR・タッカーおよびS・コーエン師弟との交流 八九年改訂版のソ連史理解の深化には、外国研究者の優れたスターリン主義研究や七三年に復刻されたトロツキー編『反対派通報』（一九二九〜四一年刊のもの）などの資料渉猟の成果も反映されている。

ロイは、『スターリンとスターリン主義再論（邦訳『スターリンとスターリン主義』）（七九年刊）のはしがきで、七〇年代に参照した外国研究者の研究に、ロバート・タッカー、ステイヴン・コーエン、ジュゼッペ・ボッファらの作品をあげている。ボッファは『ソ連共産党史』一〜四巻の著者である。いずれもロイと密接な交流があった。

ここでは、タッカーとコーエンというプリンストン大学師弟と、メドヴェージェフ兄弟との、興味深い交流関係について紹介しておきたい。タッカーは周知のように長年プリンストン大学のソ連研究プロジェクトを主宰した米国で屈指のソ連研究者であり、『ブハーリンとポリシャヴィキ革命』の著者コーエンは、タッカーの弟子のひとりだった。タッカーは一九四四〜五三年に在モスクワ米国大使館の通訳として、スターリンおよびモーロトフの米国外交官との接見を通訳したこともある。ロシア人女性と結婚し、研究者に転じ、プリンストン大学教授になったタッカーは、七四年にソ連での学術調査研究の機会を得たおり、市民権を奪われロンドンに滞在するジョレスを訪ね、モスクワ留学中にロイの協力と助言を仰ぎたいと要請した。以後、タッカーはロイとの協力関係を進めてきた。そればかりではない。タッカーは、ジョレスをプリンストン大学に招聘し、「スターリンとフルシチョフのもとのソ連の科学」について講演するよう求めた。前述のように、ジョレスの『ソ連の科学（邦訳名「ソ連における科学と政治」）（別表）も、先に述べた『ウラルの核惨事』同様、米国講演旅行の成果でもある。二〇〇六年にはタッカー夫妻結婚六〇周年祝いがモスクワで開かれ、もちろんロイも出席した。コーエンがジョレス⇨ロイの回路を助けたひとり コーエンは著作『ブハーリンとポリシャヴィキ革命』のもとになる学位論文を準備していた一九七二〜七三年にモスクワでたびたび兄弟にあっていた。ブ

ハーリンの未亡人と子息に親しく接していたコーエンの研究と、ロイのブハーリン研究には、両者の研究面をこえた交流の成果というきずなもある。

ロンドンとモスクワに分かれた兄弟が『フルシチョフ権力の時代』を共同で執筆し、ロイがモスクワで編集する論文集『二〇世紀』（露文）がロンドンで出版され、ジョレスが、ロイから送られてくる資料をもとに、外国ジャーナリストも驚くようなタイピングで『アンドロポフ』や『ゴルバチョフ』を全世界にむけて発信しえた背後には、『ニューヨーク・タイムズ』や『ワシントン・ポスト』、『ロサンゼルス・タイムズ』のモスクワ支局が、本国編集部と交わす連絡手段としての米国大手メディアに便宜供与される「外交郵便 (courier クーリエ)」の存在があった。私信が検閲され、ときに「紛失」するソ連郵便事情のもとで、ジョレスとロイは、安全・確実な交信手段を不可欠としていた。兄弟の連絡を助けたひとりが、ステイーヴン・コーエンだった。彼が大手メディアのモスクワ支局をむすぶクーリエを用いて、ジョレスとロイの文通を助けたひとりである。²¹⁾

八九年増補改訂版のロイの立脚点 六九年「初版」IIタイプ稿と八九年増補改訂版との二〇年の間に、ロイの「スターリン主義の根源とその帰結」をめぐる認識はふかまった。

この間、『スターリンとスターリン主義再論』のほか、『社会主義的民主主義』、『一〇月革命』、『スターリンの側近たち』などの単著、『フルシチョフ権力の時代』と『フィリップ・ミローノフの生と死』の共著を書き（別表）、さらにはジョレス著『ソヴィエト農業』を支えてきた。R・タッカー、S・コーエン、G・ボツファアらとの緊密な交流もあった。八九年版序文の謝辞では、ロイの『歴史の審判に向けて』に協力を惜し

まなかつた人びとの仲間に、三人が加えられている。

ロイは、「初版」との相違を意識してか、本書のサブタイトルを、「スターリン主義の起源と帰結」から「スターリンとスターリン主義」に変えている。後者は、「その分量がもう千頁を越えているので、これ以上改訂も増補もしないことに決めた」として刊行した一九七九年「増補」分の書名と同じである。「初版」および七四年改訂版（露文）とは異なる増補・改訂が施されていると明示したサブタイトル変更であると思われる。

五 「省略なし」の『ルイセンコの興亡（完訳）』（旧訳書名『ルイセンコ学説の興亡』）

ルイセンコの席卷と彼の利用価値 環境が生物の遺伝性を変化させる。つまり獲得形質が遺伝すると説き、遺伝子の存在を否定したルイセンコのエセ学説が、大戦をはさむ三〇年間にソ連科学界で猛威をふるった。後ろ盾はスターリンとフルシチョフだった。

農業集団化の失策により一九三〇年代初めの大飢饉を招いたスターリンが、遺伝学や品種改良学、植物栽培学の地道な研究よりも、乾燥や寒さに強い高収量の作物への一足飛びの転換や農業の興隆を約束するルイセンコの利用価値を、にわかに認めたところに、ルイセンコ問題の根源を探ろうとするのが、本書に賭けたジョレスの狙いといつてよい。

そうしたルイセンコの利用価値に、フルシチョフも同様にとり憑かれていた。そこでジョレスが取り組んだのが、ルイセンコ問題の所在が、誰の眼にも分かるように浮き彫りとなる、『生物学と個人崇拜 ソ連における農業生物学論争史』という書名のルポルタージュ風の読み物であ

る。タイプ原稿の束を友人たちに回覧し、意見を聞きながら幾度も改訂、更新した。そうした地下出版物『サミズダートの読者が、一九六三〜六四年になると数千人に及んだ。カピッツァ（核物理学者）も、ソルジェニーツィンも読者だった。

ドキュメンタリー『生物学と個人崇拜』の発想 ジョレスは、農科大学で故ヴァヴィーロフの弟子ジュコーフスキーに師事。反ルイセンコ主義の生化学研究者になってゆく。

ソ連で放射性同位元素（アイソトープ）の研究が始まった一九五四年以降、ジョレスはタンパク質の合成メカニズムと核酸の研究に従事、五七年九月にはアイソトープ利用の第一回ユネスコ国際バリ会議に派遣され、国際的な知古をえる。折しも五三年には、ワトソンとクリックが、遺伝子の本体、デオキシリボ核酸（DNA）の分子が二重らせん状構造をなしていると提唱し、たんぱく質の合成や遺伝の仕組みの分野における重要な諸発見が、遺伝学と生化学とを結びつけ、「分子遺伝学」という新研究分野を切り拓きつつあった。

最初の著作『タンパク質の合成と個体発生の諸問題』の公刊も決まった。だが、出版を司る審査官が、ルイセンコの学説にふれない同書に書き直しを求め、出版社も同調した。ジョレスは潔しとせず完成稿を取り戻した。研究業績の公刊では、別の若い生物学徒たちも似た問題に直面していた。学術書の可否に、共産党が裁断を下す現状を打開するには、反対派の生物学者を弾圧した科学史を綴り、「ソ連」でしか通用しない「科学」は科学たりえない証拠を提示する、ドキュメンタリー風の書物が不可欠だ。そう決断し、一九六一年夏から翌六二年三月にかけ一気に書き上げ、書名を『生物学と個人崇拜』とした。⁽²⁾ ルイセンコ問題の所在が、この凝縮された書名に表現されていた。

ルイセンコ論争を、歴史家・目撃者・論争当事者として執筆 本書は三部からなり、ジョレスは本書を三つの異なる立場から書いている。「一九二九〜四二年」の一部では、当初無名のルイセンコと彼の信奉者たちが党と政府の権威をかりて、いかに古典的遺伝学（植物栽培学者のヴァヴィーロフを含む）を排除していき、かれらを「人民の敵」として糾弾・排撃するに至る経緯を歴史家の立場で詳述する。

戦後の「四六〜六二年」の二部は、全ソ農学アカデミー一九四八年八月総会でルイセンコが、スターリンの権威をテコに、生物学・農学その他の学界に君臨していく経過を目撃者として報告する。論争の一舞台だった農科大学に四四年に入学し、同大学の生化学研究者となっていたジョレスにとって、ルイセンコ論争はまさに自身の目前で繰り広げられていた。

「六二〜六六年」の三部では、生物学の急速な発展と遺伝情報解説にかかわる一連の発見がルイセンコ派の基盤をゆるがし、手から手に回し読みされるジョレスのタイプ稿本を脅威とみなした政権当局側が、激しい攻撃を加えるさまを描く。ここでは、ジョレスが当事者（論敵のひとつ）として描かれる。全ソ農学アカデミー総裁が、『農村生活』紙で、ジョレスの地下出版書を「醜悪な政治的思惑である」と断言し、誹謗中傷のことで法廷に引き出すよう提案していた。⁽³⁾ 事実、ジョレスは一九七〇年に逮捕され精神病院に拘束される。

読者が複製・増補して急速に普及する「自主出版（地下出版）」 サミズダートの用語が登場するのは一九六六年の作家ダニエル・シニヤフスキー裁判のあとだが、それ以前にジョレスもロイも手打ちタイプ稿を信頼できる知人に手渡しする回覧書を手がけていた。

ロイが知人に直接手渡しして回収し厳格に回覧状況を掌握していたの



ジョレスの『生物学と個人崇拜』のサミズダートの紙挟みを手にするわたし
隣はティミリャーゼフ農科大学見学ツアーで通訳してくれたナターシャさん
彼女の隣はジョレスの60年代初めの同僚V・モギリョーフ農科大学元教授

に対し、ジョレスの回覧書を堪能した読者のなかには、自ら一部か数部を複製し、かれらの友人に手渡すものもあらわれた。遠隔地からも意見や増補案が寄せられる模様が日本語版序文に紹介されている。

二〇一三年秋、現代思潮新社の川辺秀治社長と筆者が、ジョレスの地下出版執筆当時の職場ティミリャーゼフ農科大学を訪ねた際、その「初版」の最初の読者だった故ニコライ・マイスリヤン元教授夫妻の息子、アレクサンドル・マイスリヤン元教授と会い、元教授の実験室で、実際のサミ（自主）ズダート（出版）本を見せてもらった。A4版用の厚紙ホルダーに、タイプで打ち出した二百枚ほどの紙束の本書が収められていた（写真参照）。この体裁で複製・回覧されていたものと思われる。子息のマイスリヤン元教授が、本書の紙束を広げ、やはり一九六〇年代のジョレスをよく知る別の教授二人とともに、「この本が広く読まれたおかげでルイセンコ主義が打ち破

られたのです」と誇らしく語った。

ルイセンコが決定的に凋落する契機のひとつにソ連科学アカデミー一九六四年総会の会員選挙におけるルイセンコ派の大失態があるが、六四年アカデミー総会で予期しない爆弾発言をするソ連の水爆開発の父サハロフも、このドキュメンタリー作品を読んでいた²⁴。一九六四年時点で、読者が延べ数千人に達していたというのは誇張でない。

ジョレスはソ連の検閲制度下での本書の公刊はないと考えていた。一九六四年のフルシチョフ失脚でルイセンコが後ろ盾を失うと、ソ連科学アカデミー幹部会が、このタイプ稿の公刊を推薦するに至ったが、結局、ソ連の検閲制度はジョレスの著作公刊を許さなかった。フルシチョフを失脚させたブレジネフ政権は、イデオロギー担当の枢機卿スースロフに率いられており、かれが「イデオロギーでは容赦するな」、「自分の傷に塩をすり込むことはない」と、亡きスターリンの命をまもっていたからである²⁵。

英語版 *The Rise and Fall of Lysenko* 刊行の意義 『ルイセンコの興亡』と『歴史の審判に向けて』の米国での出版を機に、日本語版を含む多くの外国語版が誕生していった。それは、サハロフの人権擁護活動とソルジェニーツインの作品公刊とともに、ソ連の異論派の活動の広がり世界的に印象づけることとなった。

ジョレスとロイの海外出版は、国内で合法的な出版を許されない異論派が自らの著作権をまもる闘いでもあった。西独等の亡命ロシア人系出版社により、著者の同意なしに地下出版が海外で雑誌に転載され、単行本として公刊されれば「反ソ扇動・宣伝」を口実とする弾圧を招きかねなかった。そうした危険を避けながら、ジョレスとロイに米国での出版を確実にする助言と協力を惜しまなかったのが、前述した『ルイセン

『問題『Ysenko Affairs』の著書がある著名な科学史家のノースウェスタン大学D・ジョラフスキー教授である。Let History Judgeのロイの序文の前に、英語版読者向けの「編集者序言」を寄せ、ロイ著の画期的な意義を紹介したのがジョラフスキー教授だった（石堂訳『共産主義とは何か』には含まれない）。

『ルイセンコ学説の興亡』英語版の刊行から、まもなく、『ニューヨーク・タイムズ』や『ワシントン・ポスト』のモスクワ特派員が、「ソ連反体制生物学者の精神病院拘禁」とソルジェニーツィンやカピッツァやサハロフの「ジョレス解放要求運動」を伝え、このニュースはわが国の「毎日」や「朝日」でも報じられた。米紙モスクワ特派員たちが、その後ジョレスとロイに破格の厚意を示すようになるひとつの契機が、この抗議と解放の運動だった⁽²⁶⁾。

原著テキストを三割省いた英語版。重訳による各国語版 独・仏・日・伊・スウェーデン語版などもつぎつぎ現れた。

だが、M・ラーナー教授に託した英語版は、原著者からみると、意外な展開をみせた。なかでも驚きは、底本になるテキスト原稿を三割がた省いたほか、叙述の仕方にも手を加えていた。そして、コロンビア大学出版部は、この問題含みの英語版の版權を、日本を含む各国出版社に販売していた。

苦勞するのが真面目な翻訳者である。金光不二夫は、「原文がロシア語である以上、英語版から重訳するとどうしても誤訳が避けられないこと、英語版にはタイプ用紙にして一〇〇ページ近くを原著から省略して編集しているようなので、原著の趣旨が曲げられているのではないかと恐れた。金光が、「ラーナー教授は原文の送付を断り、単に訂正箇所のみを送ってきた。このため、原文の入手を断念し翻訳には『グ

ラニ』に発表された初稿「個人崇拜と生物学」（海賊版）を参照せざるを得なかつた」と述べていた事情を、往年の『ルイセンコ学説の興亡』（金光不二夫訳、河出書房新社、一九七一年）の愛読者にも理解ねがえたかと思われる。難点は、重訳と、ラーナー教授の露文テキストの誤読にあり、金光の邦訳は全体として優れている。

教授が結んだ、原著者に英語版の著作権がないとの出版協定が、教授が死んだ一九七七年まで続いた。事情は異なるが、西側諸国で翻訳された著書の著作権や印税問題で、ソルジェニーツィンもサハロフも悩んでいた。ジョレスは、『ルイセンコの興亡』や『メドヴェージェフ文書』、ロイから委嘱された『歴史の審判に向けて』の版權問題などで経験をつみ、やがてこの作家と科学者にも、何かと相談にのれるノウハウを備えるようになっていく⁽²⁷⁾。

一九九三年版『ルイセンコの興亡』は「サミズダート」 本書の運命には続編がある。

ゴルバチョフ政権が一九九〇年にジョレスの国籍を回復すると、モスクワの出版大手が本書刊行にのりだしたが、それも束の間、ソ連崩壊で出版社自体が倒産した。

ジョレスは、資金の欠乏する出版社に代わり、所要経費全額を、インフレが昂進するルーブルでなく、米ドルで自弁し、一九九三年に故国ロシアで、母国語による活字の本書を初めて刊行した。

『日本語版選集』第二巻が収める『ルイセンコの興亡』の原著テキストも、『生物学と個人崇拜』の初版と二版と同じく、結局、「自費」もしくは「自前」による公刊物として世に出たのであった。サミズダートの出版はズダートである。

ラーナー英語版はどこを省略したのか 同教授はジョレスに、英

語版読者が興味をもたない箇所や、衆知の事実は省いたと手紙で釈明してきたという。

ルイセンコ問題の根源を浮き彫りにしようとするジョレスの本書に賭けた狙いを、見抜けていたなら、土壌や肥料の問題、あるいは古典的遺伝学の達成を削減することはなかったと思われる。これらの論点が農業問題をアキレス腱とするソ連型社会主義の構造的な病理と不可分の研究テーマであったはずだからだ。

たとえば英語版とそれを底本とする各国語版は、本書第二章「一九四八年のウイリヤムス主義の復活と牧草式輪作農法の全国への波及」をまるごとカットしている。

本章でジョレスは「四八年農学アカデミー総会後のウイリヤムス主義の開花と『スターリン式自然大改造計画』の形態による牧草式輪作農法の全面導入」を包括的に取り上げた。したがって、露文原著以外の読者は、ジョレスが本書で、ルイセンコ論争との関連で「スターリン式自然大改造」の暴挙を批判的・説得的に議論している事実を知らないできた。

ジョレスが公害問題を取り上げていないとの批判は当たらない。邦訳者・金光はまさに、そうした事態がおこるのを危惧していた。危惧は現実となっていたのである。

その金光は四五年前に、重訳ではない、完訳を自らの課題としていた。「いずれの日にか、メドヴェージェフの最終稿を入手し、改訂版を出さねばならないと思っている」と。金光は二〇〇〇年に他界した。しかし、その三年前の一九九七年秋に、拙訳『ソヴィエト農業』の縁で、札幌学院大学がジョレス&リータ夫妻を招聘した際に、金光は東京でジョレスと存分にロシア語で語りあった。

本書は、英語版および邦訳版がどこを削除したか分かるよう、すべて表示してある。

読者へのメッセージを省いた英語版　ジョレスは、自由と独立を愛するアメリカ人読者に呼びかけた、サミル自家・ズグート出版に賭けた異論派^②反体制派知識人としての、「あとがき」にある次の一節も無視してしまった^③。

本書のこの版は事実上の第三版と言つてよい。最初の二版は一九六二年と一九六三年に公刊された。手打ちのタイプライターで印字したタイプ稿の本であろうと、活版による製本であろうと、本はあくまで本である。著作の学術的な意義、著作の社会的な影響は、公刊 *izdanie* (=publication) の方式や、読者数の寡多に左右されない。本書英語版の読者の方々が、もしも、本書の初版と第二版をソ連で読んだに違いのない読者数に匹敵するならば、それは私の望外の喜びとなろう。

故・木原均（文化勲章受賞者）の書評　金光訳をみて書評を寄せた人びとのなかから、『日本のルイセンコ論争』の著者・中村禎里が、「わが国が生んだもつともすぐれた生物学者のひとり」という木原均の書評を紹介しよう。

木原は、ロシア人自身の手で初めてルイセンコ学説の歴史と内幕を綴るこの本が陽の目をみた意義について、「ルイセンコ説を知らない方々、またはもう忘れた人たち」のために、その説を改めて紹介しながら述べている。木原はまた、ラーナー教授が「英訳の時にかなりの省略がされた」ため、一般読者にわかりにくい箇所ができ、日本語訳の術語に「見

なれぬ言葉がある」が、「それは原語によるものだろう」と述べ、「しかし全体としては好訳である」と評した。実に的確な指摘である。²⁰

六 小括——異なる個性が、四つの複眼で考察し、意見を交換した回路

メドヴェージェフ双生児はこの十一月で満九〇歳になるが、ともに現役の著作家である。

ロイは、二〇一一年、『静かなドン。偉大な小説の謎と発見』を再刊した。ソルジェニーツインらは、シヨロフは真の作者でないとしたが、ロイは、本書でその説を退ける。近く、『一〇月革命』の英語版の再刊が予定されていると聞く。出版社の側にも「ロシア革命百年」という企画の意味があるのだろう。

ジョレスは、九〇歳の節目にエッセー集『危険な仕事』を執筆中である。放射性同位体研究という「危険な仕事」に道に踏み込んだ著者夫妻とロイ夫妻を主人公とする歴史学と科学の分野における営みを、二〇一〇年代の今の視点から回顧する非常に興味ぶかいエッセーが、毎月のようにメールの添付ファイルで届く。先月届いたエッセーには、旧ソ連解体に関連するゴルバチョフの失脚をめくり、ジョレスの新しい推理が展開されている。

ジョレスはそれらの論点も含め、モスクワのロイと今も毎週、電話で議論している。

小括にあたり、ひとつだけ感想をのべ、付随するエピソードを紹介しておきたい。

四つの眼でみて、意見を交換し、発言する 兄弟は一七歳で従軍。退役・復員して別の大学に入学。学部も専攻も全く別だった。入党した

ロイと非党員で通じたジョレス。一卵性双生児でありながら、何ごとにも活動的で社交性豊かなジョレスと、シャイで実直、遠慮がちなロイというように、性格も極めて対照的だった。ところが、兄弟はたえず弟・兄を切り離せない分身として思索し、討論し、創作に励んできたごとくである。

したがって、もしもふたりが、著しく個性の異なる双生児でなかったならば、ロイの『歴史の審判に向けて』も、ジョレスの『ルイセンコの興亡』も、世界に名を残す著書として出版に漕ぎつけることはなかったのではないか。そう思えてならない。

ロイによれば、ジョレスのサミズダートは、遺伝学論争史というその道の専門家でなければ難しいジャンルの作品でありながら、自分のような文系の人間をふくめ、誰にもわかる、説得力ある作品であるがゆえに支持が広がったという。ジョレスは、自身の複眼と、そしてロイの複眼を通して見えてくる遺伝学論争史を書いたと言えるのではないだろうか。ロイの歴史書も、そうした四つの複眼の所産と読める。

ジョレスとロイの秘密の回路 それでは、一九七三年以降、ロンドンとモスクワに分かれて活動するふたりを結びつける回路を支えたのは誰だったのか。

ジョレスの精神病院監禁事件の現場取材を通して兄弟の毅然とした姿勢にモスクワの外国特派員団が敬意をいっていた。事件の翌年、モスクワ特派員として赴任したヘドリック・スミス（『ニューヨーク・タイムズ』）やロバート・カイザー（『ワシントン・ポスト』）らが、米国の本社編集部との連絡に用いる外交郵便を、ジョレスとロイとの私信と文献と資料の交信の便宜に供したのである。

筆者が初めてロンドンのジョレスを取材したときの質問項目のひとつ

つが、『ソヴェイト農業』の執筆過程で、モスクワのロイとどう連絡を取り合ったのかというものであった。⁽¹⁾

R・タッカーの弟子S・コーエンもこの交信手段を用いて、兄弟同士のコミュニケーションをサポートした。ロサンゼルス・タイムスも、モスクワ特派員が異動しても、兄弟のサポート役が継承された。H・スミスとR・カイザーの両特派員は米国に帰任すると、ベストセラー作家になった。スミスは『ロシア人』『ロシア人新版』『新ロシア人』を、そしてカイザーは『ソ連の中のロシア』一部・二部・三部を世に送り出した。ふたりのベストセラーに、どれも邦訳がある。世界は広いが、兄弟には意外と身近に人びととふれ合う回路があった。

ロシア革命一世紀 ジョレスと初対面した二二年前、筆者はこう書いたことがある。⁽²⁾

だがロンドンとモスクワとに分離された二人は、さまざまな制約にもかかわらず、相互の密接な協力のもとに全世界が注目する執筆活動を続けてきた。当局がジョレスの帰国を閉ざしたことで反対派は打撃を受けたが、そのことで逆に当局は、最も精悍な虎を野に放つ結果にもなった。外部からは容易に理解し難い、ソ連国内の政治的諸事変にたいする、精度の高い情報に基づく、複眼的視角からのジョレスの示唆によって、われわれはどれだけ足らざるところを補い、また無用な国際的リアクションがどれだけ未然に回避されてきたことか。

二〇一七年を前に、スターリン主義とスターリンなきスターリン主義なしに語れない一〇月革命一世紀周年を、イデオロギーを超えて記念

するのに、ジョレス&ロイ・メドヴェージェフ兄弟、ロバート・タッカーとステイヴン・コーエンのプリンストン大学師弟、そして、ヘドリック・スミスとロバート・カイザーの元モスクワ特派員の六名を、二〇一七年ノーベル平和賞の候補に推すという考えはどうだろう（残念ながらタッカー教授は故人である）。

ノーベル平和賞はノルウェー・ノーベル委員会 (Den norske Nobelkomitee) が選考する。

ノルウェーはかつて、追放されたレオン・トロツキーを受け入れ、当地で『裏切られた革命』が書かれた。(了)

註

- (1) 久保英雄訳『知られざるスターリン』現代思潮新社、二〇〇三年、序文、二一—一五、四六八—七三頁。「なかなかの知恵者」の箇所は久保英雄訳では「知性に溢れた人間」としている。スターリンとイスラエル問題へのコメントをふくめて、拙稿「メドヴェージェフ双生児『知られざるスターリン』の重版によせて」『アソシエーツ・ニューズレター』二〇〇三年一月号、六七—七頁、を参照された。
- (2) Medvedev, Zhores A. "Two Decades of Dissidence." *New Scientist*, vol. 72, no. 1025 (1976), 264-67.
- (3) Medvedev, Zhores A. "Facts Behind the Soviet Nuclear Disaster." *New Scientist*, vol. 74, no. 1058 (1977), 761-64.
- (4) Medvedev, Zhores A. "Dangerous Business" の第三章「私の新しい職位」。
- (5) イリイン著「チェルノブイリ虚偽と真実」長崎・ヒバクシヤ医療国際協力会発行、一九九八年、五頁。「A. K. G. Shchukov 医師とともに、ソ連の放射線防護の第一人者であった生物物理研究所のイリイン所長が、ウラル核惨事で起きた医療上の問題のみみ消しに動いたことを批判したことがある（『チェルノブイリの遺産』みすず書房、二二二頁）。ジョレスによる、二〇〇六年にロンドンでポロニウム殺人事件が起き、事件の謎を解く『ロンドンのポロニウム210事件』を上梓した際（わが国出版界はM16情報を受け売りする親レゾフスキー反フーチン本だけを邦訳した、英国秘密情報部M16説と真向から対立するジョレス説を裏づける根拠を、イリイン所長が呈示したという。拙稿「放射能毒殺（ポロニウム210）事

- 件をめぐるジョレス・メドヴェージェフの洞察』『労働運動研究』復刊第一八号、二〇〇七年、八八〜九五頁も参照。
- (6) ジョレス『ソ連における科学と政治』みすず書房、一九八〇年、九〇、九八〜九九頁。
- (7) 同右『科学と政治』九二、九三、九九頁。拙稿『メドヴェージェフ兄弟による「原子力収容所 Atomic Glag」認識の舞台裏』『藤女子大学紀要』第五〇号、二〇一三年、一九〜二〇頁。
- (8) 天野尚樹訳・佐々木洋監訳『回想』一九二五—二〇一〇 現代思潮新社、二〇二二年、三〇〇頁。
- (9) 同右『回想』九六〜九七、一〇六〜一〇七頁。
- (10) 石堂清倫訳『共産主義とは何か?』上巻、三二書房、一九七三年、二〇六〜一〇五頁。
- (11) 木村浩訳『収容所群島』は、被告人ヤクボヴィッチの裁判を、「メンシエヴィキ合同事務局裁判」としての適訳でない。現代思潮新社版は「メンシエヴィキ連邦ビューロー裁判」とす。英語版『The Case of the All-Union Bureau of the Mensheviks in 1925』: A. Solzhenitsyn, The Gulag Archipelago, 1973, p.399.
- (12) ジョレス「チュエリツヒのソルジェニーツィン」メドヴェージェフ兄弟共著『ソルジェニーツィンとサハロフ』現代思潮新社、二〇〇五年、三二一〜一七頁。論文集『二〇世紀』(露文)の邦訳版が、石堂・他訳『ソヴェト反体制 地下秘密出版のコピー』第一輯/第二輯、三二書房、一九七六年、七七年である。同『論文集』第三号英語版の序文で、ジョレスがヤクボヴィッチ証言の重要性を『収容所群島』における歪曲について述べている。Roy Medvedev (ed), Samizdat Register II, Norton, 1981, x-xi.
- (13) 『歴史の審判に向けて』露文原著の一九五〜九六頁。なお、英語版一九八九年改訂版は二七三〜七四頁を参照。
- (14) 以上のロイの逮捕と刑事裁判、スリル満点の逃避行の典拠は、注4の前掲エッセー集『危険な仕事』のГлава 10, По Провале в Пушкино (第一章『学術都市プーシチノのプロタワで』)とГлава 14, Новое направление исследования (第十四章『新しい学派』)による。
- (15) ロイ著・石堂清倫訳『スターリンとスターリン主義』(原著名「スターリンとスターリン主義再論」)三二書房、一九七九年、はしがき。
- (16) 前掲『回想』二七九頁。
- (17) ロイ『一〇月革命』未来社、一九八九年、三一〜一五頁。
- (18) 『ソヴエト農業 1917-1992—集団化と農工複合の帰結』北大図書刊行会、一九九五年、vii-viii。
- (19) 同右七五頁
- (20) 溪内譲『スターリン政治体制の成立』全四部、岩波書店、一九七〇、七二、八〇、八六年。同『上からの革命』同書店、一九八六年。
- (21) メドヴェージェフ兄弟とタッカー／コーエン師弟との関係、およびコーエンの仲立ちについては、前掲『危険な仕事』のГлава 33, Третий раз в Америке (第三十三章『三度目のアメリカ』)に49。
- (22) 著作集第二巻第二分冊『ロイセンコの興亡』の拙稿解題を参照。
- (23) 本書第三部第二章末尾、前掲『回想』六五頁も参照。

- (24) ルイセンコ派の大失態とサハロフの活躍ぶりのエピソードは、ロイ「サハロフに関する回想より」前掲『ソルジェニーツィンとサハロフ』六〇〜六四頁。
- (25) 前掲エッセー集『危険な仕事』のГлава 15, Лекция для Конгресса по геополитике в Киеве (第七章『オプニンスクの秘密』)前掲『危険な仕事』のГлава 15, Лекция для Конгресса по геополитике в Киеве (第七章『オプニンスクの秘密』)。
- (26) 加齢学キーエフ国際学会の報告)による。
- (27) ジョレス「サハロフに関する覚書」『ソルジェニーツィンの思い出から』前掲『ソルジェニーツィンとサハロフ』所収、参照。
- (28) 本書序文(一九六七年一月の英語版への序文)
- (29) 『自然』「遺伝」面誌にのった木原均のすぐれた論評が木原「二つの遺伝学」『小麦の合成 木原均随筆集』講談社、一九七三年、に収められている。最近刊行された伊藤康彦の著作『武谷三男の生物学思想』風媒社、二〇一三年刊には、木原の書評がいろいろもつて忘れた人たちが、わが国の生物学論争史のどういつ論争客であるかを示唆するところがあり、興味深い。
- (30) 金光不二夫「邦訳者あとがき」『ロイセンコ学説の興亡』河出書房新社、二五七頁。
- (31) 筆者はジョレス著『ソヴエト農業』の完訳稿作成前の一九九三年夏、ジョレスを訪ねた。インタビューの一切を「ジョレス・メドヴェージェフ大いに語るーわが人生、わが研究」季刊『窓』一八号、一九九三年、に収めている。秘密の回路に関する質疑の一部を紹介しよう。ジョレスはこう言った。
- 一九七三〜八八年に二人は一種の非公式の連絡回路を設けておりました……この回路でロイは書きかけの著作の草稿を送ってきて、わたしは草稿にたいする論評や、多くの文献類を送りかえし、また、彼は失職して無収入でしたから家計の支援もしました。通常の郵送も可能でしたから、用紙から……タイプライターまで、不足を訴えるものは何でも送りました。
- ……米国人から、「旅行の際ロイに会えるはずなので紹介してほしい」との電話がくるので、「何か運んでくれる場合に限り、紹介状を書きます」と応じ、内緒の連絡網を設けたのです。
- ……ロイとの率直な議論、草稿や文献その他の重要な資料の交換には、外国、とくに米・英の特派員が支援する回路を利用しました。米国の特派員団は、外交特権(外交郵便) courier(リエ)のこ) を使える唯一のジャーナリスト集団でした……(このあと、実際にスマイス特派員の助けでどうクーリエを使ったのかの話がつづ)。
- (32) 同右『窓』一八号、一四一頁。

補遺 不破哲三『前衛』連載「スターリン秘史」のメドヴェージェフ兄弟への好意的評価

本誌『アリーナ』への投稿を準備していた七月に、『前衛』連載の不破哲三論文「スターリン秘史 巨悪の成立と展開」の最終章、第三〇章が、ジョレス&ロイ・メドヴェージェフ兄弟の、とくに二人の共著『知られざるスターリン』を驚くほど好意的に紹介した。

筆者は定年退職後、「メドヴェージェフ兄弟研究」をおもな課題のひとつとしている。このたびは、はからずも『ジョレス&ロイ・メドヴェージェフ選集』日本語版刊行をお手伝いした関係もあり、本稿の「補遺」というかたちで、メドヴェージェフ兄弟の所説にかかわるかぎりで、『前衛』連載の不破哲三論文をとりあげることとした。

1 メドヴェージェフ兄弟の批判と肯定的な紹介

『デIMITロフ日記』が炙り出すスターリンの覇権主義的謀略 不破は、科学的社会主義の「ルネッサンス」のためには、スターリン時代の空気を吸い、スターリンの理論に打ち込んだ経験のある世代には応分の果たすべき課題があるという。学生時代に『経済学教科書』や『マルクス・レーニン主義の基礎』に読んだわれわれもその最後の世代にあたるだろう。

その不破が、二〇〇九年、スターリンの身近な人物として一九三四〜四八年の独裁者の言行を直接記録した『デIMITロフ日記』に出会い、これまで知り得なかった多くの新事実を直面した。この『日記』を縦軸に、その他の機密解除された諸史料を横軸に分析・考察した結果が、『前衛』誌で三〇回連載された労作「スターリン秘史 巨悪の成立と展開」である。

『前衛』の存在を意識しなくなつて久しい筆者にとつても、この連載だけはほぼ毎月読み、教えられることが少なくなかつた。

不破の兄弟批判（一） 不破論文がメドヴェージェフ兄弟に言及するのは第一七章「独ソ戦始まる」と第三〇章「一九五〇〜五三年」である。一七章の前半は、ヒトラーの「不意打ち」で緒戦に敗北を喫したスターリンが、しばらく「意気消沈」状態に陥つたというフルシチョフ説には、『デIMITロフ日記』という有力な反証があり、同説は間違いである。側近の証言とあつて、「意気消沈」説は広く受け入れられたが、そこに「スターリン時代の歴史の先駆的な研究者として知られるメドヴェージェフ兄弟さえ、第二〇回党大会の一五年後に発表された最初の代表的な著作『スターリン主義に起源と終結』（一九七一年、日本語訳『共産主義とは何か』上下、一九七三年、三一書房）」で、フルシチョフのこの発言をそのまま引用した上で、それをさらに補強する話をつけくわえた」として兄弟を批判した^{〔1〕}。言わずもがなではあるが、この書はロイの単著であり、邦訳書の下巻は一九七四年に刊行されている。

不破の兄弟批判（二） 不破はつづいて、批判（一）について、メドヴェージェフ兄弟は、二〇〇一年発表（日本語版は〇三年）の『知らざるスターリン』で、その後明らかになった記録資料により、六月二二日〜七月二日の「スターリンの所在と行動を丹念にたどり、フルシチョフの告発が「捏造」であつたことを実証し、三〇年前の自著への事実上の訂正をおこないました」と述べる。その一方で不破は、兄弟が利用した記録資料は、スターリンの事務書記たちによる、スターリンが執務室で誰と接見したのかという記録であつて、そこには執務室以外でのスターリンの活動の記載はないことから、「メドヴェージェフが、接見記録のない日をスターリンが別荘にこもつた日であるかのように扱つてい

るのは、正確な記述とは言えないでしょう……これは、戦争の最高指導者であるスターリンの行動を、「執務室での接見」という狭い視野からだけ見るもので、明らかに誤った判定でした」と批判する²⁾。

本書の序文は、スターリン主義とその歴史について、ソ連崩壊によりはじめて、「本当に深い理解」がようやく始まり、それを「客観的に評価できるようになった」と述べている³⁾。不破の二つの批判を、兄弟も歓迎すると思われる。

しかし、それ以上に歓迎したいのは、不破が、おそらく日本共産党の現役の最高幹部のひとりとして、機関誌『前衛』の誌面で初めて肯定的に往年の異論派⁴⁾反体制派知識人兄弟をとりあげ、しかも、「スターリン時代の歴史の先駆的な研究者として知られるメドヴェージェフ兄弟」と好意的に紹介したことである。ジョレスは、科学研究には百害あって一利なしと、一度も入党しなかったのに対し、ロイは、党内の民主派に位置し、反党分子として除名され、ソ連民主化の時代に復党した。ソ連共産党の民主集中制には一貫して批判的であった。

2 不破「スターリン秘史」最終章を支える

『知られざるスターリン』ジョレス三論稿

不破論文にメドヴェージェフ兄弟がふたたび登場する第三〇章「一九五〇〜五三年」は、この朝鮮戦争期に、国内で、「自分がつくりあげた覇権主義と専制主義の帝国を、いかにして維持すべきか、スターリン以後の後継体制づくりに努力を集中して」いた、かれの「最後の時期とその死」をもって終止符をうつ。

そして、「スターリン秘史 巨悪の成立と展開」を締めくくる最終章の叙述にあたり、不破は、「この章で利用した歴史資料」の典拠につい

てこう述べる⁴⁾。

スターリンのこの最後の時期について、最も多くの歴史資料を集めている論稿に、ジョレス・メドヴェージェフの三つの論稿、「スターリン、死の謎」、「隠されたスターリンの後継者」、「スターリン、ソ連のユダヤ人、『医師団陰謀事件』問題」があります。

三論稿とも……共著『知られざるスターリン』……に収録されています。共著者のジョレスとロイは、一九二五年生まれの双子の兄弟です。ジョレスは生化学者・歴史家、ロイは歴史家で、二人とも、ロシアにおけるスターリン問題のもっとも著名な研究者として知られ、最初の共同著作「誤解 ロイ単著―引用者」『歴史の審判』（一九六九年、日本語版『共産主義とは何か』上下、三一書房）以後、スターリンおよびスターリン以後のソ連に関する多くの著作が日本でも翻訳、刊行されています。

いまあげた三論稿は……私自身、個々の点では、その資料から異なる結論を引き出さざるを得なくなつた場合もありますが、この章の執筆にあたっては、三論稿で提供された歴史資料の多くを利用させてもらいました。

たしかに「スターリン秘史」の最終章を、スターリンの「帝国の維持と後継者の確保にむけた布石」をモチーフとして展開しようとするれば、ジョレス三論稿は、さまざま着想を育んでくれる刺激に富んだ作品ばかりである。不破の意図は成功していると思う。

そして、不破が、科学的社会主義の「ルネッサンス」にとつても、『歴史の審判に向けて』から『知られざるスターリン』にいたるメドヴェー

ジェフ兄弟の作品が、重要な参考文献のひとつになると示唆したことには、思想・信条をこえて、おおいに歓迎したい。

そのうえで、不破のメドヴェージェフ兄弟理解について若干、私見を述べてみよう。

ひとつは細かい事だが、「スターリン秘史」が終章を「それまでスターリンの時にしかおこなわれなかったような」スースロフの葬儀で飾っていることについてのコメントである。不破はこのフレーズを、『知られざるスターリン』のジョレス稿から引いている。

不破の引用に問題は無い。ただし厳密に言えば、ジョレスのこのフレーズは、ロイ著『スターリンの側近』（一九八三年）のスースロフの章の冒頭から引いたものである。⁵⁾『選集』日本語版には収録されない露文原著の『選集』第四巻は、本文で紹介したように、『スターリンの側近たち』と『知られざるスターリン』を収める。第四巻の人名索引で「スースロフ」の叙述を対照すれば、ジョレスがロイの「旧著」に多く負っていることが読み取れる。

3 『知られざるスターリン』のエッセンス

不破は、兄弟の共著『知られざるスターリン』のパーспекティヴを積極的に評価する。しかし、不破の評価は、あくまで「スターリン秘史」の論旨に必要な限りでメドヴェージェフの所説を吟味したものと思われる。兄弟が『知られざるスターリン』の共著全体で、何を発信しようとしたかを鳥瞰する視点から本書を評価したものではない。わたしの関心に惹きつけていけば、たとえば、本書は破格に興味深い以下のような三つの論点をなげかけている。

なかなかの知恵者のスターリン像 不破はロイが、フルシチョフ

の受け売りである、独ソ戦開始直後期のスターリン「意気消沈」説に加担したことを批判する一方、ソ連崩壊後は、機密解除史料にもとづいて、旧説を事実上、訂正しているとのべた。だが、兄弟は、本書でフルシチョフ説を「事実上、訂正」しただけではない。本文でも指摘したが、兄弟は、ソ連崩壊にともなう機密資料の開示から、「レーニンとスターリンの歴史的役割をも客観的に評価できるように」なり、「残忍な専制君主の個人崇拜のヴェールの向こうには、考えたり、思い直したり、途方もない意志の力を持ち、仕事好きな、なかなかの知恵者がいたのである」としてあらたな「スターリン像」の形象を試みた。たとえば本書五部第一章「スターリンは何を読んだか？」には、彼の猛烈な読書とそれを可能とする速読術が紹介されている。⁶⁾

冷戦を規定した「原子力収容所群島」 不破は、「スターリン秘史」を結ぶにあたり、スターリンの批判的な研究は、ロシア国内でも、日米欧でも数多く刊行されたが、覇権主義に焦点を当てた系統的な研究はほとんど見られないと述べる。この点については、「科学」を得意とする不破に、本書二部「スターリンと核兵器」のとくに第三章「スターリンと原子力収容所」を丹念に読むよう勧めたい。ジョレスは、ソルジェニーツインの『収容所群島』は『原子力収容所群島』でもあったことを示唆する。そして、この『原子力収容所群島』を基盤とするスターリンの原水爆開発体制こそが、米ソ冷戦構造を規定したとする世界観・歴史観を呈示している。チェルノブイリと福島第一の惨事を根底において規定する歴史的制約を考慮するうえで、非常に重要な示唆であると思う。

第三章「スターリンと原子力収容所」エピソードは、「異常なまでの短期間にソ連の原子力産業の全部門を作り上げた功績は誰にあるのか、……これに対する明確な解答はない」。


だが「原子炉、工場、実験場、

全てのインフラ等の諸問題を実際に解決した早さについては、紛れもなく収容所が主役を演じている。収容所は、機動性に富み、本質的には奴隷労働であるが、熟練労働の、ユニークで巨大な供給源だった。そして、原子炉や実験場を建設した囚人労働者の口封じのための鳥流し先が極東マガダンのコリマだった。こうして、ジョレスはいう。「もしスターリン型の国家政治と経済が収容所その他の強制労働のシステムなしでもやってゆけておれば、ソ連にはあれほど火急に原爆や水爆の必要性はなかったであろう。スターリンのテロルとスターリンの収容所が、それ自体が、他の全世界への恐怖と脅威とを生み出していたのである」⁷⁾。

人権無視と安全軽視、差別と抑圧の究極の事例が、兄弟の云う「原子力収容所」だった。米英ソ（中仏でも）の核帝国が人権や民族差別を顧みずに展開した核開発競争が、原子力開発全体の安全性を規定してきた。原発をめぐる安全神話や、わが国の「原子力村」の利権構造の問題も、そうした核開発の歴史のなかに位置づけて検討する必要がある⁸⁾。

スターリンの「イスラエル」建国戦争加担 不破連載論文は、ジョレスの五部第五章「スターリン、ソ連のユダヤ人、『医師団陰謀事件』」を参照し、とくにグルジアと「医師団」の弾圧事件に注目した。筆者がかつて注目したのが、同じ第三章に含まれる、「スターリンとイスラエル建国」だった。ジョレスが第三章でいう「スターリンが中東に打ち込んだイスラエル問題の楔」は、現実問題としてハンチントン著『文明の衝突』以上にスリリングな問題提起だと感じた。

スターリンは、「イスラエル建国」を支持して国連決議が成立する決定的役割を買ってたびばかりか、独ソ戦の戦利品としてのドイツ製武器をイスラエルに緊急援助し、あるいはソ連赤軍で実戦経験を積んだユダヤ人東欧難民を、「故国に帰還」させたほか、極秘裏に、ソ連軍将校を

派遣してまで、「一九四八年独立戦争」でイスラエルがアラブ五か国正規軍を打ち破るのに寄与した経緯を紹介する。ジョレスは、これには、第二次世界大戦後の英米関係、さらには米国とムスリム世界に楔を打ち込む意図があったと分析した。米国政界でネオコンが幅を利かせる土壌の説明にもなっている。

4 不破書記局長の一九七八年記念講演

日刊紙配達員 わたしが分担執筆した中野・橋本・高岡編著『スターリン問題研究序説』大月書店、一九七七年刊が出版されて半年あまりのち、『赤旗』日刊紙に不破哲三書記局長記念講演の全文が報じられた。講演の中見だし「日本型社会主義の理論的、実践的な探究」の左下に、以下のような件があった。

ある論者は、たとえばソ連におけるスターリン時代を研究して、スターリンが犯した誤りの大きさに、いわば度を失い、それをくり返さないうこと、科学的社会主義の中心問題である党の役割の否定、党の弱体化を事実上と見える議論を展開しています。……（「日本共産党の路線と展望（下）」党創立五八周年記念講演会『赤旗』一九七八年七月二二日付）

これは、明白にわれわれの『研究序説』に対する批判だった。わたしは「スターリン主義と「トロツキイ問題——工業化テーゼ」をめぐる社会主義論の一考察」を書いた¹⁰⁾。その際に、依拠した主要文献のひとつがロイ・メドヴェージェフのものであった。不破記念講演（下）を載せ

たその日の『赤旗』日刊紙を、当時、週一回のボランタリー配達員であった筆者が札幌地下鉄南北線北一二条駅近辺の担当区域で早朝配達した。自分がこき下ろされている新聞を喜んで配達するボランタリーがいるだろうか。これを機に筆者は一〇年続けた配達員を辞退した。

友人からの返信 連載論文「スターリン秘史」によれば、不破はその後、一九八二年に『スターリンと大国主義』を書き、ソ連共産党の解党とソ連崩壊に伴う機密文書の入手をもとにして『干渉と内通の記録』を執筆した。真偽は不明だが、われわれの『序説』執筆準備の合宿研究会の際、不破の実兄・上田耕一郎が、ロイの石堂訳『共産主義とは何か』を読んで衝撃を受けたという話が伝わってきた。しかし、昨年の『前衛』六月号でも本年七月号でも、ロイ原著をジョレス共著と思いがいをしているところから判断して、**不破には石堂訳を手にして読んだ形跡はないように見える。メドヴェージェフ兄弟に関心をもつようになったのは、今回、「スターリン秘史」の連載を始めてからのことではないかと推測する。**

筆者は、現在『前衛』を読んでいそうな、ごく少数の友人に、「不破がメドヴェージェフ兄弟に驚くほどの好意的な評価をしているのはなぜだろう?」とメールでたずねてみた。

筆者よりひとまわり若い世代の友人から、次のような返信がきた。

……不破(あるいはその部下)にメドヴェージェフ兄弟の書くものに当初から信頼があったわけではなく、この間収集した文書資料を読み解いた結果、兄弟の書いたものへの信頼が生まれた、とわたしは推測していますが、そのあたりはかなり微妙かもしれません。好意的に解釈すれば、不破の公的に許される最大級の「自己批判書」

と受けとめることもありかな、との思いもあります……

筆者は「自己批判書」とまでは考えが及ばなかったが、不破が、メドヴェージェフ兄弟から何かを学んだ結果としての大変好意的な評価であるのは間違いないだろう。

不破哲三が、党の「もろ刃の剣」にもなりうる、この兄弟のスターリン主義研究に、敢えて著しく好意的な評価を寄せたことを率直に歓迎したい。

(二〇二五年八月二八日脱稿)

註

- (1) 『前衛』二〇一四年六月号、二〇八〇九頁。不破の批判はロイ著一九八九年改訂版(露語原著と英語版と近刊の現代思潮社版にも該当する。露語版五六九頁。英語版七五三〜五四頁)。
- (2) 同右、『前衛』六月号、二一〇〜一一頁。
- (3) 『知られざるスターリン』序文。
- (4) 『前衛』二〇一五年七月号、二二七〜一八頁。
- (5) Meckvedev, Roy. *All Stalin's Men*. 1983. p. 61. 冒頭に、*He was buried four days later with official honours of the kind that no other Party or state leader had been accorded since the funeral of Stalin.* のフレーズがある。
- (6) 『知られざるスターリン』三四九〜五〇頁。
- (7) 同右、二二四〜一五頁。
- (8) 拙稿「広島、長崎、ウラル、チェルノブイリ、福島 — 歴史に刻まれた国際原子力村の相互支援」中部大学紀要『アリーナ』第一七号、二〇一四年、四二〇〜二頁。拙稿「メドヴェージェフ兄弟による「原子力収容所 Atomic Gulag」認識の舞台裏」『藤女子大学紀要』第五〇号、二〇一三年、二二頁。
- (9) 拙稿「メドヴェージェフ双生児」『知られざるスターリン』の重版によせて、『アソシエ21』ニューズレター、二〇一三年十一月号、六〜七頁、を参照されたい。
- (10) 拙稿(誌上討論)『スターリン問題研究序説』をめぐる経緯(加藤哲郎その他)『ディスカッション』(「エヒローグとなった」『序説』への研究序説—「スターリン問題研究序説」と七〇年代後期の思潮—) 中部大学『アリーナ』一六号、二〇一三年、を参照されたい。